

---

# オーズクライン～玻～

バース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーズクライン（玻）

### 【Nコード】

N2223W

### 【作者名】

バース

### 【あらすじ】

夏目智春と仮面ライダーダブルの戦いから数ヵ月後：『二巡目の世界』では、また新たな物語が始まるうとしていた。

この物語の主人公は苑宮和葉：夏目智春の義理の妹。

突如として姿を消した智春：街に出現する謎の怪物、そして謎の美少女が和葉に託したトランク…。

彼女の物語は、2人の仮面ライダーの登場と共に大きく動き出す。

仮面ライダーオーズ（火野映司）と仮面ライダーバース（後藤慎太郎）：異世界から現れた彼らと共に、機巧魔神と悪魔を巡る物語は

新展開を迎える!!

そして、映司達の世界に残された仲間達は…!?

『オーズクライン』改め『オーズクライン<sup>カルセドニー</sup> 琥<sup>ニ</sup>』…その欲望、  
放しろ!!

## メダルズ1…オーズとバースと苑宮和葉（前書き）

『オーズクラインく破く』、今までの3つの出来事！！

1つ、色々あってオーズクライン消滅！

2つ、何を思ったかダブルクラインが先に復活！！

そして3つ、リ・バースしてから丁度1ヵ月後の1日前になって、  
ようやく復活した！！！！

## メダルズ1…オーズとバースと苑宮和葉

『オーズの世界』

「いらっしやいませー！」

ここはクスクシエ。

夢見町の一角に佇む、白石知世子という女性が経営する多国籍料理店。

街の憩いの場の1つであり、この街ではすでに無くてはならない程の店に発展していた。

火野映司はそんな店のアルバイト兼居候の1人。

今日も明日のパンツを洗うと、この店してい制服（世間一般的に言うコスプレ）に着替えると、早速メニューとお冷を持って来店したお客さんの下へと急ぐ。

今日の彼の格好は……ハードボイルドな探偵風。

何でも今日は『仮面ライダーフェア』らしい。

店長の知世子も『仮面ライダーディケイド』に出てくる八代刑事の格好で接客中だ。

正直、普段通りの格好でも映司にとっては問題無いが、ここは雰囲気の問題だろう。

「いらっしやいませ、ごゆっくり寛いでいって下さいね！」

某ハーフボイルドとは似ても似つかないぐらいの爽やかな笑顔でそう言くと、映司は厨房へと引っ込む。

すると…、

「あっ、おいアंक！お前も手伝えよ！」

『…めんどくせえ…。』

そう言って出てきたのは…腕。

赤い右腕だ…何コレ怖い？

というのは冗談で、この腕の名は『アंक』。

メダルの怪人『グリード』の1人で、鳥系の赤いメダルを司る。

普段は泉刑事を使っているが、最近目を覚まして現在は職務に復帰。今日は休みなので信吾も来ているが、何故か知世子にこき使われて接客中。

「信吾さん病み上がりなんだから。お前たまに体使わせてもらってるんだから少しぐらい代わってやれよ！第一、その状態じゃ味わかんないだろ！」

『映司体貸せ！！』

「やだよ！？」

最近ではたまに映司の体乗っ取ってアイス食おうとするので本当にやめて欲しい…。

映司自身、体に取り込まれた『紫のメダル』の影響でグリード化し、感覚が無くなる事があったが…：…現在では抑え付けている為、今では頼もしい彼自身の力だ。

「映司くんはやくー！人手がたりないんだー！」

「あ、すいません信吾さん！…：…じゃあアंक、お前仕事終わるまでアイス喰うなよ？」

『だが断る。モグモグ。』

「味わかんないのに無理すんな！！」

「またやってたの？」

その時、映司の後ろから声が。

振り返ってみると、そこにいたのは1人の少女。

泉比奈だ。

信吾の妹で、映司達の仲間でこの店のアルバイト。

特技…怪力。

「比奈ちゃんおかえり。今日は早かったね？」

『いまのうちに…、』

「っておいアंक！！」

「アハハ…相変わらずだね…アंक…。」

だいたいはこの3人で何かしている事が多い。

アंकも顔には出さないが、映司や比奈と一緒にいるこの日常に満足している様だ。

『決して満足する事の無いグリード』であるにも関わらずに…、

アイスを貪っていると、アंकが何かの異変に気付く。

同じ様に、映司も何かを感じ取ったかのように、背筋に何か冷たいものを感じた。

間違いない…この感じは…、

『映司、ヤミーだ！！おい信吾お！！！！』

「ちよっ！？信吾さんまで連れてく気かよ！？」

「ん？おお！？え、映司君どこへ連れて行くんだ！？比奈、後任せたーーーー！！」

「お兄ちゃんも行ったーーーー！！！？？」

とある世界…、

夏目智春：それが、苑宮和葉の兄の名前。  
兄：とは言っても血の繋がりなんて無い。  
お互いの親同士が再婚した：それだけだ。  
まともに話した事も、まともに会った事すら無い。  
だが彼女にとって：彼は特別な人だった。  
あれは和葉が中学生の頃……その時、偶然にも智春に会っていた。  
そして、彼に助けてもらった。  
アレ以来、ずっと会いたいと思っていた……そして会えた。  
そして……、

「あー！ー！ー！！髪が纏まらないー！ー！ー！！！」  
『アンタねー……だから昨夜早く寝なさいって言ったでしょ？』  
「だってだって、今日から高校生になると思うと……えへへ……♪」  
『遠足前の小学生か。』

和葉は今、寝過ごしていた。  
彼女が暮らしているのは洛芦和という街の一角にある洋館『鳴桜邸』。  
。 去年まで智春が暮らしていた為、中は綺麗に纏まっているし、人が暮らすには全然問題無い。  
高校入学を機に、和葉はここで1人暮らしを始めた。  
いや：1人と言うのは正確な表現ではない：厳密に言えば：1， 5人？

『何その半端な数？』  
「咲華、どうかしたの？」

この和葉の上に浮かぶ半透明なプカプカとした存在。



名は咲華…『幽霊』だ。

和葉とは生まれたときから一緒にいる謎の少女…何故か顔は和葉と全く同じ。

口調や声色は若干違うが、見る人が見たら絶対和葉が2人いると思う。

まあ、『和葉以外誰にも見えない』の다가…。

和葉にとって咲華は、もう1人の自分の様な存在。

何を考えているのかもだいたいわかるし、何がしたいのかもだいたいわかる。

『あ、ねえねえ和葉和葉。コレコレ。』

「ん？何？」

着替え途中の和葉に対し、咲華が指差した物は…、1枚の写真。何人かの男女が写っている写真…兄である智春の物だろう。

真ん中に写っているのは智春…その周りには…、

- ・金髪碧眼の幼女（多分、交換留学生）

- ・背の高い超絶美人なお姉さん

- ・ハードボイルドを気取った様な格好をしている男性

- ・髪をクリップで留めている不思議な感じが漂う少年

- ・蛇抱いた変なおっさん

- ・豊満な胸の黒髪少女

- ・智春に抱きついて向こう側が透けて見える少女

「って、最後何これ!？」

もしかしてコレが兄の言っていた『幽霊』なのだろうか？  
というかこの少女、どこかで見た事ある様な気がする。

それにこの巨乳の美少女は…、

「この人、昨日うち来たよね？」

『……うん……。』

…そう。

この少女…つい昨日この鳴桜邸にやって来た。

銀色の大きな目のトランクを持ってくるや否や、「コレはあなた『達』の物です」と言って問答無用で置いて行った。

例のトランクはもう何か開けるのが怖いので絶賛放置中。

捨てるのも怖い…ていうかトランクなんて何処に捨てるのか？

「あ、まだ少し時間残った。んー…朝ごはん食べようかな？」

『そうしなさい、唯でさえ発育悪いんだから。』

「余計なお世話だよ！？」

再び『オーズの世界』

映司と信吾&アंकが自動販売機型の装甲バイク『ライドベンダー』に乗ってやって来たのは…クスクシエから少し離れた所にある公園。別に遊びに来たわけでは無い…ここに来たのは大事な用事があるからだ…そう、

『さあ、どうした…？この公園の遊具は全てお前の物だ。思う存分遊べ…！！』

「い…い、いっや…！！」

『ヤミー』

メダルの怪人グリードが人間にセルメダルを投入する事で、その人間の『欲望』を具現化させた怪人。

今回のヤミーはクモの様な見た目をした『クモヤミー』

昆虫系のグリードである『ウヴァ』によって生み出されたヤミー。具現化した欲望は目の前にいる小学2年生ぐらいの男の子の『公園で思う存分遊びたい』

いつも苛められて満足にここで遊ぶ事の出来ない彼の欲望にウヴァが目をつけた様だ。

ヤミーを発見すると、映司と信吾はバイクから降車。

アंकも同様に、映司と信吾の下へと飛んで来る。

『ウヴァのヤミーか：かなりのメダルを溜め込んでる：刈り入れ時だ映司！！』

「ったく、お前はいつもいつもメダルメダルって：まっ、俺はいつも通り、助けるだけだけど。」

そう言って映司は懐から3つの丸い穴が開いているバックル：『オーズドライバー』を取り出した。

それを腰に当てると、ドライバーは映司に巻き付き、右腰には『オースキャナー』が出現。

更にメダルケースを取り出すとそこから3枚のメダルを抜き取り、バックルへと装填。

順番は右から：赤、黄色、緑。

隣ではアंकが信吾の体に取り付き、彼の見た目を変えていく。

黒かった信吾の髪は金髪になり、髪形も派手に。

右腕がアंकと同様になり、憑依完了。

映司はオースキャナーを手に取り：アंकは右腕を前に突き出し：2人同時に叫んだ。

「変身ッ！！！」

「はああああああああ！！！！！」

『タカ！』

まず、映司の目の前に赤い『タカ』の紋章が出現。  
それは映司の顔面を覆うように回り、彼に遥か彼方まで見渡せる鷹の目を与える。

『トラ！』

続いては体の前に黄色い『トラ』の紋章。  
映司の胴体に、全てを切り裂く虎の爪を。

『バッタ！』

最後に現れたのは緑の『バッタ』の紋章。  
彼の脚部に纏わり付き、高く高く跳ぶ事の出来る飛蝗の脚を与える。

『タ・ト・バ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

軽快なメロディが流れると同時に、目の前に現れた紋章は全て映司に覆いかぶさった。

辺りが金色に輝くと、すでにそこに映司の姿は無く、代わりに上から『赤、黄、緑』と言った3色の戦士の姿が。

その名は：『○○○』

『無限大』を超えた更に満たされた存在、『欲望の戦士 仮面ライダーオーズ』だ。

その姿は『タトバコンボ』

オーズの仮面ライダーとしての基本形態にして、800年前の先代オーズの最強形態。

その手には専用武器でるメダジャリバーを握り、クモヤミーの前に一方、信吾とアंकが変身したのは仮面ライダーとは全く違う姿。鷹の様な頭部に、孔雀の様に派手な体色、そしてコンドルの様に強靱な手足の爪。

『炎のグリード アंक完全態』だ。

本来グリードの完全態には9枚のコアメダルが必要だが、アंकはある事情により3枚が破壊されて更に1枚は現在映司の手に。

コアは5枚しか無いが、信吾の体を使ってそれを補っている為、力と外見は完全態そのものだ。

「行くぞ映司い！！」

「ああ！！アंक！！」

オーズとグリード：本来は相容れない2つの存在が協力し、同時にクモヤミーにパンチを叩き込んだ。

オーズが少年を助けている間にアंकはキック、パンチをクモヤミーに繰り出していく。

そこへ…、

「火野！！助けに来たぞ！！」

「おっ、アंकもいるのね？　ったく、いつもお早いこった。」

「それよりも早く、ヤミーを。」

「後藤さん!! 伊達さん!! 里中さんも!!」

現れた3人組み。

1人はワイルドな服に身を包んだ青年…後藤慎太郎。

もう1人はその後藤の師匠にして、実質的この世界2人目のライダー、伊達明。

最後は唯一の女性にして後藤の上司orサポート、里中エリカ。

ちなみに今日の格好は美しいメイド服、嫌いじゃ無いわ!!

ヤミーを見るや否や、後藤と伊達は全く同じデザインのベルトを腰に巻きつける。

伊達は懷から、後藤は腕のバンドから銀色のメダル『セルメダル』を取り出すと、2人とも独自のポーズを取った。

「「変身ッ!!」」

『『カポーンッ!』』

ベルト…『バースドライバー』にセルメダルを投入すると、伊達は数回に分けて、後藤は一気にハンドルを回した。

すると2人の体を機械的アーマーが包み、新たに2人の仮面ライダーを出現させる。

1人は後藤の変身したのは『もう1人の欲望の戦士 仮面ライダーバース』

使い捨てのセルメダルで戦う事に特化した、対ヤミー殲滅用の仮面ライダー。

伊達の変身したのは『仮面ライダーバース プロトタイプ』

見た目はバースと同じだが、データ収集用の赤いラインが所々に見える。

通称『プロトバース』だ。

バースとプロトバースはオーズとアंकに並ぶと、バックルにメダ

ルを投入。

『カポーンッ！カッターウイング』

『カポーンッ！クレーンアーム』

バースの方は背中に刃物の様に鋭い『カッターウイング』が。

プロトバースは右腕に『クレーンアーム』が。

というかプロトバースは、この装備を『クレーンアーム』ととどめ専用の『ブレストキャノン』しか使えない。

プロトバースがクモヤミーを捕らえた。

その隙にオーズはメダジャリバーで、アंकは素手で、バースは背中のカッターウイングを右手で握って攻撃。

突き飛ばされると同時に、それを更に里中が追撃した。

『お前等：5対1は卑怯だろ！！！！』

「お前：アレだな、ウヴァっぽいな性格が…。」

「アंकアंक、アイツ、ウヴァのヤミーだからね？」

冷静にツッコむオーズ。

一気に決める為、アंकは自分の中のメダルを2枚取り出す。

赤い2枚：『クジャク』と『コンドル』だ。

後藤の変身するバースと共に並ぶと、オーズはトラとバッタのメダルに手をかける。

だが……、

『見つけたぞ：仮面ライダー……！！！！』

「「え？」」

「？ どうした映司？」

「後藤ちゃん？」

突然、オーズとバースの頭の中に謎の声が。

更に頭の中にキーンという謎の音が聞こえると、オーズとバースの変身が同時に解け、映司と後藤は地面に膝を突いてしまう。

「お、おい映司！！ しっかりしろ映司！！」

「後藤さん！！ 後藤さん！！」

アंकと里中が必死に映司と後藤に呼びかけるが、2人とも頭を抑えたまま苦しむだけ。

唯一戦えるプロトバースはバースバスターでクモヤミーに応戦して撃退すると、2人の下へ。

「火野！！ 後藤ちゃん！！ どうした！？」

『映司！！ おい映司！！』

「どうしたんだ映司君！！ しっかりしろ後藤君！！」

「火野さん…後藤さん…！？」

「だ…っ、伊達…さん…っ！ さと、なか…！！ ぐううう…！！」

いつの間にかアंकも変身を解いて腕と信吾に分離しており、後藤は更に苦痛に顔をゆがめる。

映司の方も、苦痛に耐えながらもアंकから受け取った赤いメダル3枚を、振るえる手でアंकへと差し出していた。

「あ…アंक…め、メダルありが…っぐう…！！」

「映司…！！」

その瞬間だった。



（させない。）

『クロガネ！！マキシマムドライブ！！』

「「「『うわっ！？』」」

「「うわああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」」

先程と違う2つの声が頭の中に鳴り、辺りが漆黒の光に包まれて…  
映司と後藤が姿を消したのは…。

本当に一瞬の出来事…映司のいた場所をしばらく見つめると、アンクはその場で大声で叫んだ。

「映司iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！」

『オーズクライン』改め『オーズクライン〜カルセドニー玻〜』…その欲望、解放しろ！！

## メダルズ1…オーズとバースと苑宮和葉（後書き）

オーズクライン新装版の時系列は…、

『もしも『仮面ライダーオーズ』がアंकもグリードも皆生きていた場合のIFの未来』です。

なお、クモヤミー逃げたくね？とか、アंक行って無くね？とか思った方。

伊達とアंकの活躍も、時々あるので（ただし元の世界で）お楽しみに！！

## メダルズ2…壊れた時計と心配と爆音（前書き）

『オーズクライン〜破〜』、前回までの3つの出来事!!

1つ、夢見町にクモヤミーが出現!

2つ、苑宮和葉が洛高入学式の朝を迎える!!

そして3つ、映司と後藤が、異世界へと飛ばされてしまった!!!

## メダルズ2…壊れた時計と心配と爆音

朝、和葉はトーストとスクランブルエッグをテーブルの上に並べ、朝食を始めようとしていた。

まだ少し時間はあったので、新聞でも見ながらゆったりと、優雅に。それを見て咲華が少し笑っていたが、特に気にする事も無く黙々とトーストを齧る。

時間はまだ8時前：うん、まだまだ余裕だ。

これを食べ終えてから着替えても十分に間に合うだろう。

『あっ、和葉和葉、最近この辺、結構大きい事故あったみたいだよ？何コレ？爆発事故？うわぁ…。』

「ホントだ、怖いなぁ…。でも、コレ3日前でしょ？エンジントラブルかなんかじゃない？」

『だよねえ。あ、和葉ケータイ、ケータイ鳴ってるよ。』

「ありがと、もしもし？」

トーストを頬張りながら電話に応答。

相手は：中学時代からの大親友だ。

『おっはよー和葉♪』

「蕎香ちゃん！」

相手は市ノ瀬蕎香。

しっかり者で面倒見の良い姉御肌の少女。

資産家の娘の様だがそんなそぶりは一切見せず、本当に心優しい子だ。

KYなところがたまに傷。

『起きてるー？』

「うん、今朝ごはん食べてたところだよ。」

『自分で作ったの？』

「トーストだけどね。あつ、でもスクランブルエッグは作ったよ。」  
『そう、偉い偉い。でも知ってる？入学式9時からだよ？』

「？ 知ってるよ？」

忘れるはずが無い。

いくら洛高受かるのに偏差値ギリギリだからと言ってもそこまで馬鹿じゃない。

時間はまだまだ8時前：あれ？

確か、少し前に時間を見た時は7：50だったはず。

あれから軽く15分以上は経っているにも関わらず、時計の針は未だに7：50を指していた。

ねえ：蕎香ちゃん：？今、何時：？」

『ん？ 8時40分だよ？』

「わああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

！！！！

『ぎゃああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！』

！！！！

叫ぶ和葉、その叫びを耳元で聞かされた拳句絶叫をあげる蕎香。

彼女は電話越しの親友に一言お礼をすると、食べかけの皿を片付けもせず、急いで着替える。

真新しい制服に感動する事も無く、勢い良くパジャマを脱ぎ捨て着替え開始。

『あつ、和葉カーテン！！！！』

「ひやあああ！！！！」

カーテン開けっ放しな事を咲華に指摘され、慌ててカーテンを閉める。

その時、和葉の目に：本来はありえないものが飛び込んできた。

どうやら：現代の日本では女子高生はバックパックを使って空を飛びながら登校するようだ。

外人が見たらきつとそう言うであろう程、上から降りてきた少女は平坦な表情で、これが当たり前かと思う様に普通に降りてきた。

2人組みだ。

1人は和葉より少し年上に思われる金髪ドリルヘアーの美しい少女。もう1人は上から金髪ドリルヘアーを抱きかかえて降りてきた全身ライダースーツに身を包んだショートカットの少女。  
2人は地面にゆっくりと降り立つと、ふうと汗を拭う。

「悪いな朱湊、空港からここまで送ってもらって。」

「気にしないでニアちゃん、じゃあ、私の『本体』は先に学校行ってるわね？」

ライダースーツの女はアディオスと言い残し、再びエンジンを爆発させて空へと飛び立つ。

飛行場で良く感じるあの感覚が和葉にも伝わり、思わず腰を抜かして座り込んだ。

そんな和葉とは対象的に、金髪の少女は何食わぬ顔で鳴桜邸へと入ってくる。

（何で入ってくるのー！ー！ー！ー！？！？！）

どうか殺されませんように：そう願いながら蹲る。

「おーい！智春ー！帰って来てるのかー！？智春ー！操緒ー！」

(…え!?)

今、彼女は智春の名を呼んだか？

そう思うとほぼ同時に、金髪の少女と和葉の目があった。

咲華も目を丸くしている。

「…誰だ…？」

「……えっと…そ、苑宮和葉…です…。」

もうそう言うしかない。

和葉の名をぶつぶつと呟きながら、金髪の少女は何かを思い出したかのように手をポンツと叩く。

「おお！智春の妹か！むっ、もうこんな時間か…苑宮和葉、お前とはもう少しじっくり話をしたいが……時間が無いのでな。では、」

「まっ、待ってくださいーい!!」

「ぶはっ!？」

出発しようとした金髪少女の脚を掴み、食い止める和葉。

そのせいで少女はこけて、床で鼻を打つ。

「っ…お、おい!!」

「まっ、待ってくださいーい！兄の事何か知ってるんですか!？」

「し、知らん!! 離せ！離さんか馬鹿者!!」

「せ、せめてお名前だけでもー!!」

ガブリ!!

別にダキバじゃありませんww

金髪少女が和葉に噛み付いた音だった。

その途端、和葉の後ろにあった置物が不幸にもひっくり返し、和葉の頭に激突。

頭を抑えて蹲る和葉を横目に、金髪の少女が立ち上がった。

彼女は美しい金髪を手でなでると、和葉を引き上げ、こう言った。

「私はアニア・フォルチュナ・ソメシユル・クラウゼンブルヒ。ニアとも呼べ、苑宮和葉。」

「おい、火野！起きろ火野！火野！！」

誰かが自分の名を呼びながら激しく揺すっている。

目をゴシゴシと擦りながら、映司は大きな欠伸と共にムクリと起き上がった。

眼前に入ってきたのは妙にワイルドな服を着た少しパーマ気味の髪型の青年と、公園っぽい風景。

頭をかきながら、まずは映司は目の前の青年に挨拶。

「……おはようございます、後藤さん……おやすみなさい……。」

「って、寝るな！！」

パソコンッ！という中々良い音が鳴り、映司はようやく完全に目を覚ます。

なお今、青年……後藤慎太郎が映司を殴るのに使ったのはゴリラカンドロイド（缶モード）だ。

「いてて……こ、ここは……？」



「わからない……こんな公園……近所には無かったはずだ……」

後藤のおかげで冷静になれた映司は公園を見渡してみる。

確かに、夢見町でしばらく宿無しで暮らしていた映司にも、こんな公園見覚えが無い。

だがライドベンドーはある……1台だけ。

「火野、お前どこまで覚えてる？」

「えっと……アंकや伊達さん達と一緒にウヴァのヤミーと戦って……急に頭が痛くなったところまでですかね？」

「お前も俺と同じか……。今頭痛は？」

「無いです。綺麗さっぱり。」

「……何だったんだ……あれは……？」

自分達は確か、クモヤミーの気配をかぎつけて駆けつけて……そこで皆で変身して戦った。

その時に急に酷い頭痛に襲われて、アंकにメダルを返そうとした辺りから記憶が無い。

何気なくポケットの中に手をつ突っ込んでみると、映司はある物に気付いた。

「あ……これ……」

タカ、クジャク、コンドルの赤い3枚のメダル。

（アंकに返しそびれたな……コレ……。アイツ……全部でメダル6枚しか無いのに……。）

「……アイツに返さないと……コレ……」

「アंकのコアか。あっ、火野、お前メダルは？何がある？」

「うんと……あ、ケースごと持って来ちゃった……」

「お前な……」

そう言いながら映司はメダルケースを取り出した。

一応、ガタキリバ〜ブラカワニまでのコンボは可能。様はオーズ全形態になれる。

ヤミーが出てもこれで対応は出来るが、その代わりアंकが心配。そう言えばと、後藤が何かを思い出したように手を叩く。

「なあ、そう言えばお前…ここに来る前に変な声聞こえなかったか？」

「あつ、確かに。なんか…『ようやく見つけた』…とかですかね？」

「やはり聞こえてたか。ここに来てるのは俺達だけ…頭痛がしたのも俺達だけ…という事はあの声が聞こえたのも俺達だけ…という事か？」

それ以前に、何で自分達はこんな所にいるんだろう？

映司は体内に眠る紫のメダルの力でアंकの気配を探してみるが…見当たらない。

本来、彼がメダルの気配を追うと、頭の中にそのメダルに対応する色が浮かぶ。

しかし映司の頭の中に『赤』は浮かばない…代わりに…、

「…ん？」

「どうした火野？」

「いやなんだか…アंकの気配手繰ってるはずなのに…何だろコレ？ 灰色…じゃない、『鋼色』？」

「鋼色？ そんなメダル無いぞ？」

「ですよ…。」

そんな感じで、映司と後藤は小一時間ほどその場で色々と悩んでいた。

結局、和葉はアニアに置いて行かれてしまった。

何でも彼女、「遅刻するわけには行かん!!」と言って…どう考えても人間技とは思えない運動神経で高速で学校まで行ってしまった。どうせもう和葉は遅刻確定…なので入学案内のパンフレットでも読みながらのんびりと登校する事に。

『和葉、よそ見しながら歩いてたら危ないよ?』

「大丈夫大丈夫、私こう見えて運動神経いいんだから!」

咲華の忠告も聞かずに和葉は俯いたまま鼻歌を歌う。

パンフレットを開きながら洛高についての説明を読む。

彼女が今日から通う洛高…正式名称は『私立洛芦和高校』

地元でも有名な『超教派』のミッション系学校で、校名は十字架を意味する『ラ・クロワLa Croix』から取られている。

進学校ではあるが、生徒達の意志に任せた自由な校風が特徴。

生徒中心というのをこれでもかと前面に押し出した結果なのか、なんとこの学校…学校から公認された生徒会が3つもある。

1つめの生徒会…『第一生徒会・親聖防衛隊』

ローマカトリックを信仰し、校内の治安維持を目的とした生徒会。

運動部を管轄しており、基本的な学校行事の祭、活躍するのはここ。

2つ目は『第二生徒会・巡礼者商連合』

プロテスタント系カルヴァニズムを信仰し、学園の金銭管理などを統括する生徒会。

委員会を管轄しており、学園の予算案は全てこの生徒会が管理する。

3つ目は『第三生徒会・ロイヤル・ダークソサエティ王立科学狂会』

聖公会系キリスト教を信仰し、学園内で最も強い権力を持った生徒会。

文化部を管轄しており、その実態は謎に包まれている…怖い。もう名前からして怖い。

「色々あるんだ～：おもしろ～い！」

『何？アンタ生徒会入るつもり？』

「まさか、ちょっと凄いなあって思っただけだよ。」

何せ生徒会が3つもある学校なんて滅多に無い。

というか、『無い』

部活も色々と豊富にあるらしい：運動も文化も実に充実している。

何故か隅っこの方に一個だけ『科学部』と小さい字で書いてあるのは何か意味があるのだろうか？

『っていうかそろそろ急ぎましょ？さすがに初日から1時間以上の遅刻はやばいわ。』

「わかってるよ、大丈夫。だってこっからなら学校までだいたいあと10分ていd、」

ドカアアアアアアアン！！！！！！

その時、和葉と咲華の耳に何かが炸裂するかのように大きな爆音が聞こえた。

何か、金属類が弾けとぶ：そんな感じの音。

「何だろう今の…？」

『どこかで事故でもあったんじゃない？ほら、さっさと学校行くわよ。』

「…ちよつと気になる…。」

『は？あつ、ちよつと…和葉ー！』

そして、和葉は咲華の制止も聞かず、そのまま爆発音のした方へと

行ってしまった。

悩んだ末、映司と後藤が辿りついた結論：それは『わからない』

タカカンドロイドに探索もさせてみたが、手がかりになりそうなものは一切無かった。

成す術無く、2人はその場に座り込み所持品を確認。

映司の方はオーズドライバーとメダルケース、比奈に勧められて購入した携帯電話と小銭と明日のパンツ。

後藤の方はバースドライバーとバースバスター、メダルリュックに携帯に財布。

プラスでライドベンダー1台。

2人の所持金を合わせても合計5万もいかない。

携帯もアンテナ3本立ってはいるがどの番号に電話しても繋がらずこんな状態でどうしろいうのか：絶望的な状況に2人ともらしくも無く肩を落とした。

「まいったなあ：信吾さんも比奈ちゃんも電話出てくれないし：。」

「こっちもだ、伊達さんも里中也全く出ない。会長にも掛けてみたが無理だった。」

「：ねえ後藤さん、ここって：本当に『俺達の知ってる世界』何でしょうか：？」

「何？どういう意味だ火野？」

「ああ、いえ：、昔俺の爺ちゃんが言ってたんです。『俺達の暮らしている世界とは別に、世界は無数にある。俺の夢はそんな世界を

全て渡り歩く事だ』って…。」

「それは単なる掛詞じゃ無いのか？」

「そうだと思いますけど…でも、この現状からだったらそれぐらいしか思い浮かなくて…すいません…。」

「いや…別に謝る事じゃない…だが…そんな事ありえるのか…？」  
でも、と後藤は思い出す。

数ヶ月前、自分は異世界の存在と出会っている。

仮面ライダーアクセルという存在と…。

同じ様に映司もダブルという異世界のライダーと共闘をしている、  
そしてこの現状。

まさか本当に？そう思わずにはいられなかった。  
その時、

「…ハッ！！」

「どうした？」

突然、映司の瞳が紫に光った。

同じ様に後藤の持つゴリラカンドロイドもウォンウォンという唸り  
音を上げ始め、2人は立ち上がる。

「ヤミーだ…それも近い…！！」

「ヤミー…まさか、さっきお前が感じた『鋼色の気配』ってヤツか  
！？」

「わかりません…行きましょう！！」

「ああ！！」

2人は急いでライドベンダーにセルメダル（後藤の）を投入すると、  
後藤運転で2人乗りし、気配のする方へと向かった。

最初に思った事は、『どうして気になったんだろう？』

その次に思ったのは、『何でこんな生物がいるんだろう？』

次は『ここから逃げないと』

最後に思ったのは『体が動かない』

和葉と咲華は爆音のする方へとやって来た。

だが、そこで見たものは車の衝突事故なんかじゃない。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

大きな蜥蜴の様な怪物：『はぐれ眷属』が車を食い千切り、暴れ狂う光景だった。

## メダルズ2：壊れた時計と心配と爆音（後書き）

感想待ってます。



### メダルズ3…記念日とメールと都市伝説（前書き）

『オーズクライン』、前回までの3つの出来事!!

1つ、遅刻しそうな和葉の前（寧ろ上）に、謎の2人の少女が飛来!

2つ、映司と後藤が妙な気配に気付く!!

そして3つ、和葉の目の前に、ロスト・チャイルド『はぐれ眷属』が出現した!!!

### メダルズ3…記念日とメールと都市伝説

「ハッピーバースデー♪トゥーユー♪」

ここは鴻上ファウンデーション。

世界的に名を馳せた大企業であり、一部を除き、その名を知らぬ者はいない。

「ハッピーバースデー♪トゥーユー♪」

しかしその実態は、人々の『欲望』を喰らう怪人…『グリード』達と戦う戦士、オーズを影ながらサポートする謎の巨大財団。

メダルを利用するツールの全てはこの組織が開発した、バースもその一部だ。

「ハッピーバースデー♪ディア……、」

そして、この財団を束ねるこの男。

強面の顔にスーツという井手達で、誕生日賛歌を口ずさみながらケーキ作りに勤しむ男…鴻上光生。

彼が先程から作っていたバースデイケーキ…鴻上は後名前を入れるだけというところで、手を止めた。

何故なら…、

「…………里中君、我が財団で今日、誕生日の者は誰かね？」

今日、誰が誕生日か知らないからだ。

ケーキ作りは単なる趣味なので、別に誰のケーキというのを決めては作っていなかった。

なので毎日毎日、ケーキを作っては秘書である里中に誕生日の者を調べさせ、地の果てまで追い詰めてでもそのケーキをプレゼントする。

しかし、鴻上が目を向けた先に、いつもそこにいるはずの里中がいない。

彼女は鴻上の秘書であると同時に、仮面ライダーバースである後藤のサポート。

先程後藤と伊達と共に出かけた事を思い出した。

ふう、と肩を落とすと、鴻上はとりあえず作ったケーキを綺麗にラッピング。

それが終わると同時に、会長室の扉をやぶり、1人の男が入って来た。

「おい鴻上いい！！！」

金髪に派手な服装…そして異形な右腕。

アंकだった。

その後ろには伊達、里中もいる。

アंकはツカツカと鴻上の所まで歩いてくると、彼の本体である右腕で鴻上のネクタイを掴んだ。

「何だねアंक君、偉く騒々しいが何かあったのかね？」

「……またお前の仕業か……！！」

「何の事かね？そう言えば、今日は火野君の姿が見当たらないが？」

「とぼけんな！！お前映司どこにやった……！！？」

「お、おいおい落ち着けよアंक？会長、俺が説明しますわ。」

怒鳴り散らすアंकとは対象的に冷静な伊達。

アंकは何とか体の持ち主である信吾が引つ込め、伊達が鴻上に先程のクモヤミ戦であった事を話した。

突然苦しみ出したオーズとバース、そして消えた映司と後藤。

本当に、何の前触れも泣く起きた予想外すぎる出来事だった。

そして、こういう不測の事態にほぼ必ずと言って良いほど絡んでくるのがこの鴻上。

今回もどうせコイツの仕業だろう、そう考えたアंकは伊達と里中そして体の持ち主である信吾の言い分も聞かずにここまでやって来た……というわけだ。

全て聞き終えると、鴻上はクツクツと怪しい笑みを浮かべ、手を後ろで組む。

「なるほど、だが今回の件は私はノータッチ、無関係だ。残念だったねアंक君。」

「ちっ！」

「……フッフ……やはり、今日は誕生日の様だ……」

そう言う、鴻上は折角ラッピングしたケーキの包装を取り、箱に手をかける。

そこからケーキを取り出すと、乗せられた板チョコに本日誕生日の者の名を書く。

書かれた名は、『O O & b i r t h』

オーズとバーズだった。

「…何の真似だ…？」

「誕生日だよアング君、この2人のね？」

「つぎけんなっ!!! テメエ状況わかってんのか!？」

「ハッピーバースデー……！！！！！！！！！！」

一言。

その一言で、アंकは完全に黙ってしまった。

あまりの威圧感に、何も言えなくなってしまったのだ。

「今日は素晴らしい記念日だよ。この世界の『欲望』は……この世界だけでは収まりきらなかったという事だ。そして火野君と後藤君はこの世界の『欲望』に選ばれたのだよっ……！！……まさに、この2人の新たな人生の門出、誕生日だ。素晴らしいっ……！！」

「……じゃあ、ヤミーとかはどうすんだ？火野と後藤ちゃんがないんじゃない？」

「それは君達で何とかしたまえ……！！」

「……。」

「里中君、君は当分の間伊達君のサポートに回ってくれ。アंक君、もしもオーズ不在の間、この街を守りきることが出来たならば……、ケーキを持ちながら、鴻上は会長室の中心へ。」

彼が思いつき床を蹴ると、会長室の床が半透明に。

その下に広がっていたのは……いつぞや映司に渡し時と同じだけの、超大量のセルメダルの山。

「これを、プレゼントしよう。」

「……。」

考える事数秒。

するとアंकはクルリと皆の背を向け、会長室を出て行こうとする。

「おいアंक！お前どこ行くてんだ……！」

「……あのヤミーをぶっ潰すんだよ。おい鴻上、今の約束忘れんなよ」



彼らは人々を喰らう事で、本来親から与えられるはずだった『愛』を摂取する。

和葉はその為の郭公の獲物。

ロスト・チャイルドは一度狙った獲物は決して逃さない：絶対に喰らうまで追い続ける。

「いや：いやああ！！」

『和葉！その壁に隠れましょう！！』

咲華に言われるままに和葉は近くの公衆便所の裏に隠れた。

幸いこのロスト・チャイルドは目と頭が悪いらしく、簡単にかく乱する事に成功。

だが、もしも一歩でも出よう物ならば和葉を待っているものは：『死』だ。

「何で：どうしてこんな事に：！！」

『どうしてロスト・チャイルドがこんなところに：！？GDは一体何をしているのよ：！！』

「咲華：何を言っているの：？」

時々、咲華が何を言っているのかわからなくなる時がある。

兄である智春が留学した時も、『シュバルツシルトの闇：『科学の光が落とす影』か：』と、和葉には到底理解不能な事を口にした。

生まれた時から一緒にいる自分と同じ顔を持ったこの幽霊の少女：一体何者なんだろうと常に思う。

だが、今はそんな事考えている暇なんて無い。

今の優先事項は：この状況の打破、それだけだ。

恐怖のあまり、思わず目から涙が溢れてくる。

それと同時に、生まれてから今までの思い出がフラッシュバックして来た。

これが走馬灯なのか：今まで迷信と思っていたが、どうやら本当の様だ。

その時、和葉のケータイがブルブルと鳴りだした。

どうやら蕎香が心配して、何通かメールを送ってくれた様だ。

『やったよー！私と和葉、また同じクラス☆クラスメイトの皆も良い人そうだし、これから楽しくなりそう！でも、やっぱり知らない人達ばっかだからちよつと不安くだから遅刻大魔王の和葉君、早く来くい（怒）###』

「…えへへ…また、蕎香ちゃんと同じクラスなんだ…嬉しいなあ…」

笑いながらそう言うが、その笑顔が非常に痛ましい。

恐怖で引きつった顔を無理やり笑顔にしているといった感じだ。

和葉は震える指で返信メールを打つ。

「『ごめんね、もうすぐいけるから』…グスッ…『また、2人で頑張ろうね』…送信…っと…」

『和葉…。』

「…ねえ咲華…私、死んじゃうのかな…？これって、自業自得…なんだよね…？入学初日から寝坊なんてしちゃうから…きつと神様が…罰を与えたんだよね…？」

『……………そんな事無い…。』

先程まで和葉と一緒に蹲っていた咲華が、突然立ち上がった。

彼女はロスト・チャイルドの下まで出て行くと、両腕を広げて立ちはだかる。

「咲華！？」



『聞きなさいロスト・チャイルド！！アンタ、私の声も姿もわかるわよね！！私の魂を上げる！！だから、この子に手を出すのは止めなさい！！もしも和葉に指一本でも触れたら…地獄の底でお前を呪い殺してやる！！！！』

「咲華何してるの!？」

『グオ……グオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！』  
咆哮するロスト・チャイルド。

それに圧倒される和葉と咲華……だが、咲華は折れなかった。幽霊だからきつと大丈夫……本来ならばそう考えるだろう。

だが、彼女は違う……この様な行動1つ1つが、彼女の『魂』をすり減らしていくのだ。

それでも咲華は引かない……何故なら……

『私の大事な妹は……絶対に殺させたりしない!!!!!!!!!!』

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「！」

大きく腕を振り上げるロスト・チャイルド。さすがに、それには咲華も思わず目を瞑る。このままでは……和葉は呟く……。

「……けて……。」

今、この時点での彼女の最も大きな『欲望』を……

「助けて……!! お兄ちゃん……!!……!!……!!」

「せいやああああああああああああああああああ!!……!!……!!……!!」

その言葉に答えるかのように、ロスト・チャイルドを何者かが蹴り飛ばした。

青年だ。

どこの国でも通用しそうな服を身に纏った青年。

彼のとび蹴りによってロスト・チャイルドはぐらつき、バランスを崩す。

青年は地面に着地すると、和葉へ駆け寄った。

「君たち！！大丈夫！？」

「え…あ、あの…？」

「怪我は無いね！？なら良かった！！」

『何？この人…？』

「火野！！！」

その時、その青年を呼ぶ、バイクに乗ったもう1人の青年の姿が見えた。

最初の青年…火野映司と、バイクの青年…後藤慎太郎は2人揃うと、ロスト・チャイルドの前に立つ。

「火野、その子達は？」

「偶然通りがかったみたいです。2人とも、離れてて！！」

「『は、はい！』」

映司の言葉に従い、2人から少しばかり距離を取る和葉と咲華。

咲華の方は映司と後藤の言葉に妙な違和感を感じながらも、和葉を引率して林の陰に。

2人とも下がった事を確認すると、映司は3つのスロットが設けられたベルトを…後藤は金色のハンドルとガチャポンのカプセルの様な装飾があるベルトを腰に巻きつけた。

「…どうだ火野？」

「間違い無いです…『紫』はコイツに反応してる…!!」

「俺のカンドロイドもだ。だがコイツ、どう見てもヤミーじゃないぞ…!!？」

「でも、コイツがこの街をこんなにしてるんなら…やる事は一つです!!」

「わかってる、行くぞ!!!」

お互いに頷きあい、映司は懐から3枚のメダルを、後藤はリストバンドから1枚のメダルを取り出した。

映司の方は3つのスロットのついたベルト…『オーズドライバー』の左右にまず赤と緑のメダルをそれぞれ投入し、最後に真ん中に黄色のメダルを入れてバックルを傾ける。

後藤の方はメダルを右手で構えると、それをベルト…『バーストドライバー』に投げ入れた。

最後に映司はそれをスキャナーで読み取り腕を交差させ、後藤はハンドルを一気に回し、同時に叫んだ。

「「変身ッ!!!」」

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ!タッ!トッ!バッ!』

『カポーンッ!』

2人のベルトから、それぞれ特徴的な音が鳴り響く。

すると2人の体は自分のベルトから発生されたエネルギーに包まれ、その姿を変えて行った。

まず映司。

彼は頭、体、足の3箇所にもダルの幻影がグルグルと渦巻き、それが重なってオーラングサークルを形成。

それが体に覆いかぶさり、火野映司は『コアの戦士 仮面ライダー オーズ』に。

後藤はカプセル状のエネルギーが全身を包み込み、更に体中に機械的アーマーが覆いかぶさっていく。

それらが全て装着されて頭部のUフラッシュャーが赤く発光すると、後藤慎太郎は『セルの戦士 仮面ライダーバース』に。

2人はそれぞれ固有の構えを取ると、そのままロスト・チャイルドへと向かって行った。

そして、それを見て驚かない和葉達ではない。

「か、仮面ライダー!?!」

『何和葉?知ってるの?』

「咲華知らないの!?!ほら、少し前にあった都市伝説!普通の人に変身して怪物と戦うヒーロー、仮面ライダー!洛高付近にいるっていう噂だったけど:本当にいたんだ:!!」

恐らくはダブルの事だろう。

彼らも何ヶ月か前にこの世界で戦ったのだから。

しかし、オーズ達も和葉達もそんな事知らない。

今は目の前の敵を倒すだけ。

トラクローを展開させ、ロスト・チャイルドを斬りつけるオーズ。

それを支援する形で、バースがバースバスターで応戦。

しばらくの間2人で戦い続けた映司と後藤だからこそ出来るコンビネーションバトルスタイルだ。

だがオーズはロスト・チャイルドの尻尾に弾かれてしまい、その場に転がる。

バースが駆け寄り、オーズの体を引き上げた。

「…くそ…大きすぎて、全然攻撃が通らない…！」

「となると、もう少し威力の高い攻撃がいるか…火野、クジャクとブレストキャノンのダブルアタックで決めるぞ…！」

「了解です…！」

作戦の打ち合わせが終わると、オーズは早速メダルケースから朱色のメダル…『クジャク』を取り出した。

彼の元の世界での相棒 アンクを構成するコアメダルだ。

オーズはクジャクメダルに手を合わせる。

「アンク、少しの間お借りします。」

そう言ってペコリと頭を下げると、例の如くトラのメダルを取り出し、クジャクを装填。

オースキャナー片手に、3枚のメダルを読み取った。

『タカ！クジャク！バッター！』

すると黄色かった真ん中の『トラアーム』の前にクジャクの紋章が。体にそれが重なり、オーズのボディは赤い『クジャクアーム』に変化。

左腕にはクジャク専用武器である『タジャスピナー』が装備され、オーズは数ある亜種形態の内の一つ 『タカジャバ』へと変身を遂げる。

タジャスピナーは飛び道具にもなる万能型武器、クジャクの炎を左腕に溜めると、オーズは遠距離からロスト・チャイルドを攻撃。

それにあわせてバースもバースバスターを連射、程なくしてロスト・チャイルドは動きを止めた。

決めるならば…今だ。

「火野…！」

「はい!!」

『タカ! クジャク! バッタ! ギン! ギン! ギン! ギガスキャン!!』

『カポーンッ! ブレストキャノン セルバースト』

2人はお互いに合図すると、オーズの方はバースのメダルリュックから拝借したセルメダル4枚とベルトのコアメダル3枚をタジャスピナーへ装填してスキヤナーで読み取り、『ギガスキャン』を発動。バースの方はベルトのスロットへセルメダルを1枚投げ入れて『ブレストキャノン』を装備、のちに更に5枚程メダルを追加して『セルバニツシュ』して『セルバースト』を発動。  
ロスト・チャイルドから一定の距離を取ると、2人はそれぞれの必殺技をロスト・チャイルドへと撃ち込んだ。

「せいやあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

「シュウウウウウウウウウウウウウウ!!!!!!!!!!!!!!」

『コア・チャージアタック』と『ブレストキャノンシュート』が同時にロスト・チャイルドに炸裂。

その強力すぎる2人のライダーの猛攻にロスト・チャイルドは成す術無く、直撃を受け、爆散。

体はガラスの様に透けて行った後、バラバラに碎けて消滅した。

敵の完全消滅を確認すると、オーズとバースは顔を見合わせて変身解除。

映司と後藤の姿に戻ると、2人は隠れていた和葉と咲華へと駆け寄った。

「君たち大丈夫!? ああ、ゴメンね、驚かせちゃって。」

「怪我は無いか？怖い想いをさせて、本当にすまなかったな。」

「あ…ああ、い、いえ…。」

『……。』

都市伝説の『仮面ライダー』を目の当たりにして、和葉は少し困惑している模様。

それはそうだ、何せ：彼女は昨日までこんな漫画みたいな事経験するとも思わなかったのだから。

「俺は火野映司、本当に無事でよかったよ。」

「後藤慎太郎だ。ところで君達、1つ聞きたいことが…。」

『あのー…、』

「「なに？」」

そろそろーっと咲華が手を挙げ、映司と後藤の言葉を遮った。2人とも咲華に振り返り、首を傾げる。

「咲華、どうかしたの？」

「咲華ちゃんって言うんだ。俺映司、よろしくね！」

『えっと…こんな事聞いたら変かなー…って思うんですけど…。』

「何だ？」

『私の事、見えるんですか？』

「？ う、うん…見えるけど…それがどうしたの？」

『私、幽霊なんですけど……。』





「後藤さん、俺色んな国行きましたけど、幽霊なんてはじめて見ました…。」

2人ともこう言っているの、和葉と咲華の2人は映司と後藤にペコリと頭を下げてから学校へ。

和葉達が去った後も映司達は悩み続け…そして、ある事に気付いた。

「あ、後藤さんそう言えば…、」

「どうした？」

「あの2人にここがどこか…聞きそびれましたね…。」

「……それを言うな、俺だって今さっき気付いたんだから…。」

咲華に遮られた為、ここがどこか聞けなかった2人。

振り出しに戻ってしまった2人の異世界生活は、まだまだ前途多難のようだ。

### メダルズ3…記念日とメールと都市伝説（後書き）

オズカルとダキバを集中的に投稿します。

10月から11月ごろに、ディケイドのNOVEL大戦予定。

## メダルズ4…バツタとメダル争奪と嵩月奏（前書き）

『オーズクライン〜玻〜』、前回までの3つの出来事！！

1つ、和葉と咲華が『はぐれ眷属』ロスト・チャイルドに襲われる！

2つ、映司達失踪が鴻上の仕業だと考えたアंकは鴻上ファウンデーションに乗り込む！！

そして3つ、和葉達を襲ったロスト・チャイルドを、駆けつけたオーズとバースが撃退した！！！！

## メダルズ4…バツタとメダル争奪と嵩月奏

先程の騒動から約15分後……和葉達はようやく目的地である『洛芦和高校』に辿りついた。

入試の時には緊張のあまり、入学説明会の時には感動のあまり校舎を良く見る事が出来なかったので入学の時にはちゃんと見ようと決めていたが、今も状況が状況だけにそれは出来ない。

というかもう、どうやって校門を潜ろうかと思う事で精一杯だ。何せ現在午前10時45分…入学式開始からもうすでに2時間弱経っている。

さすがにもう式は終わって、今頃は教室待機だろう。勿論、こんな有名な私立校が遅刻など認めるはずが無い……時間が時間だけに、多分今日はもう入れない。

まさか入学式初日から欠席だなんて……予想外以上に予想外な事態に、和葉はただただ肩を落とすしかなかった。

もしも時計が狂ってなければ……あそこで爆発なんかに興味を持たなければ……あそこであんな怪物が出てこなければ……

色んな『たられば』が頭の中をグルグルと回る。

でも、と、咲華がクスクス笑いながら和葉の前にふわりと降りてきた。

『でも、映司さん達がこなかったら今頃和葉こうしてここにいなかったよね。』

「う…うん、その点は不幸中の幸いだったかも。」

『都市伝説の『仮面ライダー』とかいうのとも会えたしね。』

確かに、あの状況…和葉だけだったら間違いなく死んでいた。

だがその時に現れた謎の2人組み…仮面ライダーオーズと仮面ライダーバース。

火野映司と後藤慎太郎…あの2人のおかげで、和葉は今でもこうしてここにいる事が出来る。

もしも映司達が来なかったら…そう考えるとゾツとする。

『今度あったらちゃんと御礼、しないとね。』

「うん。勿論！」

「アナタ、そこで何してるの！」

その時、校門の向こう側から1人の女子生徒が姿を現した。

左腕に『生徒会』と書かれた腕章を付けた女子生徒だ。

彼女は校門越しに和葉に近寄ると、右手に持っていた名簿を見ながら和葉に問う。

「アナタ、今何時だと思っているの？もうすぐ学校、終わっちゃうわよ？」

「す、すみません！ちょっと…色々あって…」

嘘はついてない。

実際に色々あったので、正直に言ってるっちゃ言っている。

『屁理屈。』

咲華のツツコミはきつと気にしたらいけない。

自分にそう言い聞かせ、何とか実際の遅刻の最大の原因『忘れてた』というのを言わない様にする。

「アナタ新入生？名前は？」

「苑宮…和葉です…。」

「苑宮さんね…。あら？アナタ、遅刻届け出てるわよ？」

「え？」

遅刻届けが出ている…？

もしかして蕎香が出してくれたんだろうか？

いや、彼女だって今日が高校生活初日…そんな物出すはずが無い。

この学校で彼女の知り合いといえ、蕎香と、留学した兄 智春だけ……そんな気の聞いた物出してくれる知り合いなんているはずもない。

意味が良く分からない和菓を差し置いて、女子生徒は話を続ける。

「夏目の妹？ 引越しの準備ね、お疲れ様。アナタの教室は7組だから、急ぎなさい。」

そう言うと女生徒は校門を開け、和葉を中へ招き入れた。

とりあえず門を潜り、和葉は女子生徒に頭を下げる。

「あ、ありがとうございます…えつと…」

「佐伯よ。2年7組佐伯玲子、第一生徒会副会長よ。ほら、早くきなさい。」

和葉は何が起きているのかわけのわからないまま、とりあえず教室へと向かった。

「火野 おおおお！……！！！！！！お前 えええええ！！！！！！」

「え？ 何ですか後藤さん？」

その頃、映司と後藤はとりえず昼食を取っていた。

本日のメニュー…映司シェフの気まぐれバッタの丸焼き…。

多分、アラスカ料理。

仕方が無い、お金も食べ物も無いのだ……こんなものぐらいしか食べれない。

一応後藤がお金持っているが、映司が『この先どのぐらいこんな事になるからあまり使わない方が良い』と、その辺からバツタ獲ってきた。

映司曰く、『今までの旅生活の中で、一番安心して食べられた虫料理』らしい。

いや、これは料理じゃない…虫だ。

「ほらほら後藤さん、早く食べないと冷めちゃいますよ？味は『アレ』ですけど、一応タンパク源です。」

「いらん！！そんな物食うぐらいならコンビニで何か買ってくる！！」

「ダメですよ、この先何があるか分からないんだから、お互いなるべくお金は使わないように…。」

「今がその状況だろ！？」

そう言うが、後藤も相当腹が減った。

この辺でコンビニなんか知らない。

何より腹が減った…こんな物でも、食べないよりはマシかもしれない…。

そう思い、後藤もバツタに手を伸ばし…脚を一齧りしてみた。

感想は…、

「…これは食べ物じゃない、虫だ。」

とても食べれた物じゃ無かった。

そんな物をガツガツと食べている映司の気が知れない…否、知りたくない。

水だけで腹を膨らませようと水道を捻り、水を飲みだす後藤。

水を飲みながら、彼は先程の出来事について頭を捻らせた。

見た事も無い謎の怪物…『はぐれ眷属』ロスト・チャイルドとの戦闘。

あんな物、自分達の暮らしていた街では見た事無い。

先程、映司と話していた『ここが異世界かもしれない』という疑問に…いよいよ信憑性が出てきた。

極めつけはあの幽霊少女…咲華だ。

到底、自分達の世界の常識では考えられない…だとすれば本当に？



（ありえない…とも、言い切れないな…。何せ、メダルやオーズが存在してるんだ。異世界ぐらい、あってもおかしくは無い…。）

「火野。」

「何です？」

「お前…ここが本当に異世界だしたら、どうする？」

「本当に異世界なら…：とりあえず、俺達に話しかけてきたあの変な声の人を探して、帰る方法を聞く…：ですかね？連れてくるぐらいなら、帰る方法も知ってるでしょうし。」

「…：しか無いか…：。わかった、とりあえず、一休みしたらまた少しこの辺歩いてみるぞ。」

「了解です。」

教室に入った和葉は、まず最初に蕎香の姿を探した。自分に生きたいという『欲望』をくれた親友…一刻も早く、彼女に会いたかった。

彼女の苗字は『市ノ瀬』なので、出席番号は4番。

席は教室の上側の扉からすぐに見える位置にあった。

蕎香の姿を見つけた和葉は勢い良く彼女の下へと行き、机をダンツ！と叩いた。

「蕎香ちゃん！」

「和葉！！あんた遅すぎ！！心配させないでよね！！」

「エヘヘ…ゴメン…。」

『良かったわね和葉。』

若干涙を浮かべながら、和葉はコクリと頷く。

オーズとバースがいなければ叶う事の無かった再会だ…改めて、あの2人に会ってお礼がしたい。

本気でそう思う。

しばらくの間蕎香と一緒に他愛も無い話で盛り上がっていると、担任の柱谷が教室に入ってきた。

これから新人生は今後の日程の説明を受けて、それで終了。

後は各々気になる部活を見るなり、帰宅して遊ぶなり、自由時間だ。勿論和葉のこの後の日程は空白。

当初は蕎香と遊ぶうかとも考えていたが、それは止めて映司と後藤を探してお礼を言うという日程に決めた。

2人とも、割と目立つ格好なので…探せば見つかるだろう。

自分の席に着き、何の気無しに机の中に手をつ込みながらそう考えていると…和葉はそこに入っているある物に気付いた。

取り出してみると、それは手紙。

差出人の名は『K・T』…宛名は『苑宮和葉』様。

内容は…

『放課後、科学部の教室で待ってます K・T』

だけ。

ご丁寧に、科学部とやらの部活の部室の場所までの地図まで入っていた。

この手紙が入っていた封筒にはハートマークのシールが…更にこの内容から推測するにこれは…

(『ラ、ラブレター……!!???』)

どっからどう見てもラブレターだ。

とりあえず、一番最初に驚いたのは、こんなの貰った事よりも、まだこんなの実在してたんだという事。

それからしばらくして、『貰った事に驚きでした。』

『へえー：アンタみたな娘に出す人いるんだあ：かわいそうに：。』

「失礼だよ！！でも誰だろ：私の知り合いて、蕎香ちゃんぐらいしかいないんだけど：。」

『一目惚れとかいうのでしょ。とりあえず、放課後そこに行って見れば良いんじゃない？』

「う、うん：そうしてみる：。」

## 『オーズの世界』

「おっ、やってるやってる！」

その頃元の世界では、伊達と里中の2人がヤミーの出現した現場へと急行。

すでにアंकが来ており、彼はすでに信吾に憑依して右腕のみ怪人態に変えていた。

出現したヤミーは先と同じクモヤミー：ウヴァのヤミーだ。

里中がバースバスターを構えると同時に、伊達は腰にプロトバースドライバーを巻きつけた。

ミルク缶からセルメダルを一枚取り出すと、それを右手で弾いて左手でキャッチ。

「変身！」

ドライバーのメダル投入口にそれを入れると、数回に分けてハンドルを回す。

『カポーンッ！』

ガチャポンのカプセルを開けた時の様な音が鳴ると、伊達の体はベルトから出現したアーマーに包まれ、仮面ライダープロトバースに変身。

バースバスターを構えると、走りながらクモヤミーを撃ち狙い、飛び上がってクモヤミーを蹴り飛ばした。

『ぐう！！』

「ほお、結構溜まってんじゃない？刈り入れ時って感じ？」

「おい伊達、お前1人締めしようって気じゃ無いよな……？」

上で見ていたアंकが飛び降りてき、着地と同時に彼は完全態へと姿を変えた。

プロトバースを威嚇する様に手を向けると、プロトバースはそれをどうどうと押さえ込む。

「そう言うアंकも、メダル1人でも持っていこうっていう考えなんじゃねえの？」

「フンッ。おら、行くぞ！！」

「っしやあ！！んじゃアイツにとどめ刺した方がメダル1人締め！

！それで文句ねえな！！」

『カポーンッ！クレーンアーム』

そう言って、プロトバースはクレーンアームを装備。

どうやらこの2人、『分けあい』という言葉を知らないらしい。

とりあえずヤミーを倒さない事にはメダルも何も無いので、プロトバースはクレーンを伸ばしてクモヤミーを攻撃……しようとするが、

アंकが上空から炎を放ち、プロトバースの邪魔をして先にクモヤミーに到達。

右手と左手で交互にパンチを繰り出すと、クモヤミーの腹を蹴ってメダルを散らばらせた。

それを拾って体に吸収すると、力を上げて更に強力なパンチをクモヤミーに叩き込んだ。

「お、おいアッコ！！おまつ………ったく、しゃあねえ………そっちがその気なら、俺だって！！里中ちゃん、時間稼ぎよろしくう！！」

「了解しました。」

一旦クレーンアームを収納し、プロトバースは再びセルメダルをプロトバースドライバーへと投入。

ハンドルを回してカプセルを開くと、プロトバースの胸元に巨大な大砲が出現した。

『カポーンッ！ブレストキャノン』

バースの必殺武器『ブレストキャノン』だ。

里中がバースバスターで、アंकがパンチと炎でクモヤミーを攻めている間に、プロトバースはミルク缶の中のメダルを次々とドライバーへと投入していく。

『カポーンッ！セルバースト   セルバースト   セルバースト   セルバースト』

『セルバースト』の音声が続々と鳴り、プロトバースの複眼が緑色に発光。

するとブレストキャノンの銃口にエネルギーが溜まっていき、段々と彼を圧迫していく。

よろめきながらもプロトバースは銃口をクモヤミーに向け、ブレストキャノンを両手でしっかりと握った。

「よっし充填完了!!! アンコ!!! 里中ちゃん!!! 危ないからちよつとどいてろ!!!」

「あ?」

「ほら、行きますよ。」

「あ、いててて!!! おい!!! 頭の飾り引っ張るな!!!」

アंकの頭の：金色の鶏冠みたいなのを引っ張りながら下がる里中。2人がどいたのを確認すると、プロトバースはブレストキャノンのエネルギーを、クモヤミー目掛けて解放した。

「ブレストキャノン!!! シューーーーーッ!!!」

ズガガガガガガガガ!!! と、地面すら抉る激しい砲撃がクモヤミーに激突。

当然、たかが虫頭のヤミーがそんな物耐えられるはずも無い。

あえなくクモヤミーは砕け散り、辺り一面にセルメダルを散らした。仮面の下でドヤ顔になるプロトバース：その隙にアंकは怪人態から人間態に戻り、信吾の体から離れてメダルの回収へ。

「あゝ!? アンコてめっ!!! 勝ったの俺だろ!!!」

『残念だったな伊達、早い者勝ちだ。』

「んだと〜!!!? 里中ちゃん!!! 俺達も回収するよ!!!」

「はいはい。」

「ハハハ：コレ、お約束だよなあ：。」

元気良くメダルの回収をしているアंक達を見て、苦笑する信吾。もはやこの2人のメダル取り合いは恒例：映司と後藤がいないので、もはや誰も彼らを止められない。

一瞬自分がアंकを止めようかと思ったが、別に誰も困る（本人達を除き）わけでも無いので好きにさせている。

時間を確認しようとして携帯を見ると、比奈からメールが着ていた。

映司も含めたクスシエメンバー全員分の昼食を作って待っているらしい。

そう言えば、まだ彼女に映司と後藤の事を伝えていない…そう思いながら、信吾は空を見上げた。

（映司君…後藤君…君達は、どこへ…？）

ラブレター（？）に書かれている通り、和葉は科学部の部室へとやって来た。

胸がバクバクしている…一体、どんな人が待っているんだろう…？  
映司と後藤を探さなければいけないのに、自分は何をしているのか…  
…それでも、来ずにはいられなかった。

部室の扉に手を掛け、まずは深呼吸。

『大丈夫和葉？』

「う、うん…大丈夫。じゃあ…、行きます…！」

ガラガラ…！！

掛け声と共に、勢い良く扉を開けた。

そして…そこで待っていたのは…、

パアアアア…！！

「いらっしゃ〜い♪」

「『……………へ？』」

ラブレターをくれた男子生徒…では無く、長身の女子生徒。

彼女は和葉が来るなりクラッカーを鳴らし、口笛を吹きまくる。

その隣で本を読んでいた金髪美少女が和葉に気付いて本を閉じ、和葉に近寄ってきた。

彼女は…

「おお、苑宮和葉では無いか。」

「あ…えっと…アニアさん…？」

今朝の謎の美少女、アニア・フォルチュナだった。

「今朝はすまなかったな、急いでたのだ。」

「あ、いえ…あの…。」

いきなりの事で和葉は困惑し出す。

それに最初に出てきた長身の女子生徒…良く見ると…いや、良く見なくても今朝アニアを運んできた空飛ぶ女だ。

今朝よりも髪が長くなり、若干スタイルが良くなっている以外は全くの同じ…。

ポカンと口を開ける和葉に、女子生徒はポンポンと肩を叩き、和葉を席に座らせた。

「初めましてカズちゃん。私は3年の黒崎朱湮、この科学部の部長で第三生徒会長ね。あ、『和葉』だから『カズちゃん』でいいわよね？」

「えー…あー…はい…。」

「智春の妹だそうだな？よろしく。」

「あの…もしかしてこの手紙って…？」

「「？」」

恐る恐るラブレターを差し出す和葉。

それを見てアニアと女子生徒…朱湮は首を傾げ、何かを思い出したかのように手を叩くと、朱湮が部室の奥の方を指さした。

今まで気付かなかったが、そこにも女子生徒が1人いた。



彼女の姿は、後ろ姿でも美少女だと確信出来るほど美しく、思わず和葉はそれに見とれてしまう。

しかし、何故か彼女に見覚えがある…気のせいかと思ったが、彼女がクルリと振り返った瞬間、和葉の考えは確信に変わった。

「ようやく来ましたね、苑宮和葉さん。」

「『あ!!!』」

正面から見た彼女の姿は、やはり美しい。

100人が100人とも振り返る程…それぐらい、人間離れした超絶美少女だった。

しかし、和葉はそんな事に驚いているわけではない。

この少女…昨日、鳴桜邸に妙なトランクを置いて帰った黒コートの女その人だ…。

『このトランクはアナタ達のも物です』と言って彼女が置いて帰ったトランクはとりあえず鳴桜邸の中に絶賛放置中。

少女はフツと笑うと戸棚からティーカップを2つ取り出すと、それに紅茶を注ぎ、1つは自分の前に、2つは和葉の前に出した。

「どうぞ、召し上がってください。」

「あ、ありがとうございます…でも、2つも飲めませんよ…。」

「フツ、ご安心を。1つは、そちらの方の分ですから。」

そう言って少女が目を向けた先は和葉の右隣…咲華だ。

更に、少女は続ける。

「これからお兄さんの事についてちょっと長いお話をするんです。飲み物が無ければ辛いでしょう?」

その言葉に和葉も咲華も驚きを隠せず、思わずガタツ!と席を立つ。

「すみません……アナタ：一体……？」

和葉の質問に対し、少女は三度笑うと、一冊の本を本棚から取り出し、美しい髪を振り払いながらこう言った。

「私は嵩月奏。アナタのお兄さんの契約悪魔です。さあ、始めましょうか？」

そうして少女：嵩月奏は語り始める。

都市伝説として語られている、かつて世界を救った『ダブルクライン魔神双剋者』と呼ばれた少年と、2人で1人の仮面ライダーの物語を…。

## メダルズ5…真実と嘘と和葉の欲（前書き）

『オーズクライン〜玻〜』、前回までの3つの出来事！！

1つ、和葉は遅刻しながらも学校へと到着！

2つ、伊達とアंक（&信吾）はオーズとバース不在の世界を守る事を決意する！！

そして3つ、和葉の前に、嵩月奏が現れた！！！！

## メダルズ5…真実と嘘と和葉の欲

今から約4ヶ月前のクリスマスの夜…、

「『さあ！お前の罪を数えろ！！』」

あの日、科学部を取り巻く全ての者達の人生が変わった…。  
最強にして究極の機巧魔神…『鋼』。

その演操者の暴走により、この『二巡目の世界』は崩壊の危機を迎えたのだ…。

『欲望』のままに動く最強の魔神…それを止めたのが、苑宮和葉の兄と、都市伝説として語られる『仮面ライダー』。

『仮面ライダーダブル』と『夏目智春』だ。

『二巡目』を消し、愛する者が死ぬ事三巡目の世界の無い未来を作ろうとした鋼の演操者。

それを阻止し、世界の崩壊を喰い止めた2人の英雄。

しかし勝利の余韻に浸るのもつかの間…彼らの前に、全ての元凶たる男が現れた。

『罪』と名乗るその男は世界最初の魔神、デウス・エクス・マキナ『機械仕掛けの神』を従えて『全ての人類を悪魔と化す』という目的の為に智春やダブル達に襲い掛かったのだ。

だが…、

「『さあ…科学の光に沈め!!』」

その時、智春とその副葬処女である水無神操緒が奇跡を起こした。

『仮面ライダークロガネ』だ。

時空を切裂き、理を捻じ曲げるその仮面ライダーの登場により、『罪』は敗北。

しかしそれにより自由の身となったデウスは世界を喰らい尽くす為に活動を開始。

食い止める術は無い…誰もがそう思った。

その時立ち上がった仮面ライダークロガネ。

『彼ら』は嵩月や朱湮、アニア…そしてダブル達に笑いかけ、こう言った。

「じゃあ、行つて来るよ……奇跡を起こしに。」

こうして仮面ライダークロガネ…夏目智春と水無神操緒はデウスを破壊する為に異空間へと消えて行った。

最後に仲間達に最高の笑顔を残して…。

「…これが私達を知る、夏目君達の最後です…。」

全てを話し終え、嵩月は『Double Klein』と手書き書かれた本を閉じ、紅茶に少し口をつけた。

テーブルにカップと本を置き、目の前に座っている和葉と咲華の顔を見る。

咲華の方は思ったとおり困惑した表情…問題は和葉の方。

彼女は目に光が灯っておらず、ポカンと口を開けてただただ嵩月の顔を眺めていた。

いや…嵩月の顔を見ていると言うより、ただ目の前を向いているだけの様に見える…。

そんな彼女を見ても嵩月は特別表情は変わらず、再び紅茶を一口飲んだ。

「…これでアナタに話す事はありません。もう帰っても大丈夫ですよ。」

「…………だ。」

「え？」

今、和葉がポツリと何か呟いた。

どうやら咲華でもその言葉は聞き取れなかった様で、『か、和葉？』と彼女に恐る恐る近寄る。

そして…、

「嘘だ…嘘ですよそんなの…。」

「嘘ではありません、全て事実です。」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ…そんな嘘だ!!だって…常識で考えておかしいでしょう…? 機巧魔神? 使い魔? 二巡目鋼仮面ライダー神!? そんな非科学的な事信じろって言うんですか…?」

「確かに『非科学的』ですが…これは非常に理に適った『科学的』な話です。そもそも科学というのは…、」

「もういい!!!」

バンッ!!!とテーブルを殴りつけて立ち上がる和葉。

その時カップを叩き割ってしまい、破片が手に突き刺さり血が出るが…彼女はそんな事は気にせず…いや、気付かずに続けた。

「だって約束した!!あの日…あのクリスマスの日に…一緒に鳴桜邸で暮らそうって…そんな事言った人が自分からいなくなるなんて事あるわけ無いじゃない!!!嘘つきです…嵩月先輩も黒崎先輩もアニア先輩も!!!みんなみんな嘘つきです!!!!!!」

『あ、待って和葉!!和葉!!』

そのまま和葉は手から血を流しながら部屋を出て行く。

見かけの割りに足が速く、咲華もそれを必死に追おうとする。

一応最後に部屋の前で一礼すると、咲華も和葉を追って行ってしまった。

2人がいなくなったのを確認すると、嵩月はふうと溜息をつき、和

葉が叩き割ったカップの破片を拾い始めた。

「ちよっと奏っちゃん…いきなりあそこまでズバズバと話して大丈夫なの？」

「……。」

「確かに…昨日まで日常の世界にいたアイツが、いきなり『黒科學』の世界に足を踏み入れるとなると…相当だな…。」

「あれはカズちゃんには酷くてもものじゃ無いかしら？もう少し時間をかけも、」

「…願うなら…。」

「「？」」

「和葉さんが…心の底から夏目君に会いたいと願うなら…これぐらいは序の口です。ニアちゃん、そこ…破片落ちてるから気をつけて。」

「ん？あ、ああ…。」

最後まで淡々とした表情と声色で破片を全て片付けると、嵩月は再び椅子に座り、先程和葉に読んで聞かせた『Double Klein』というタイトルの本を読み始めた。

「後藤さーん…そっちどうでしたー…？」

「全然ダメだな…お前は？」

「さっぱりですねー…。」



映司と後藤の2人は二手に分かれ、元の世界に戻る為の手段を色々調べていた。

とは言っても雑誌で都市伝説系の事を調べているだけで、詳しい事は全くわかってない。

とりあえず分かった事は3つ…。

- ・この世界には以前も仮面ライダーがいた。
- ・この世界にも怪物がいる。
- ・寝床が無い。

これだけだ。

簡単に見つかるとは思っていなかったが、実際になるとやはりガツクリ感が桁違い。

やはり手掛かりらしい手がかりと言えば自分の中にある『紫のメダル』と後藤のゴリラカンドロイだけだ。

これで片っ端からヤミーの気配（らしきもの）を追っていくしかないだろう。

しかしその方法も確実ではない、寧ろ可能性は0に近い。

それでもやらないよりはマシかと思いながら、映司は焚き火をたき、後藤はバスに変身してクレインアームで川で魚釣り。

思ったより大量に取れたのでさっそく頂く事にする。

「美味い…：美味い…：美味いっっ！！！！！」

「ああ、後藤さんそんなにがつつかなくても一杯ありますから。お、これ食べ頃かな？」

虫だけじゃやっぱ腹が減る…：というか虫で腹が膨れるはずが無い。そして後藤はそれすら食べていない。

こうなるのは寧ろ当然だろう。

「もぐもぐ……なあ火野……。和葉ちゃんと咲華ちゃんだったか？彼女達にもう一度会うつて言うのはどうだ？」

「和葉ちゃん達に？」

「ああ、和葉ちゃんとはともかく……あの咲華という子、どう見ても普通じゃ無い……もしかしたら何にか手掛かりを掴めるかもしれない。」

「成る程……でも、それだったらあの怪物から逃げる方法とかも知ってるんじゃないですかね？あの様子からすると何も知らない可能性の方が……ッッ！！？」

その時、映司の瞳が紫色に光った。

それと同時に後藤のカンドロイドも反応し出し、2人は一斉に立ち上がる。

「後藤さん！！！」

「よし、行くぞ！！！」

そう言うの後藤は手のメダルホルダーからセルメダルを取り外し、ライドベンダーへ投入。

ボタンを押してライドベンダーをバイクモードに変形させると、後藤運転で映司後ろで気配のする方へと急いだ。

『オーズの世界』……クスクシエ

その店の前で、信吾とアंक、伊達と里中の4人はジッと立ち尽くしていた。

決して店に入って従業員やるのが嫌だとかそう言うのではない。

映司と後藤の事を比奈や知世子にどう説明するか…それで悩んでいた。

里中は端から自分から説明する気が無いのか、彼女は手鏡片手に髪を整えている。

アंक、伊達。信吾…多分、説明するとしたら信吾からだろう…。  
この面子に何で入っちゃったんだろうと本気で思いながら、頭を抱えた。

『おい…信吾どうすんだ…?』

「俺が聞きたいよ…あー…比奈達に映司君達の事なんて説明すりゃいいんだ…!?!」

「まっ、とりあえず中に入らない事には始まらないっしょ!行くよー里中ちゃん!」

「はい。」

「あ、だ、伊達さん!?!」

ミルク缶を背負いなおし、クスクシエの扉を思いっきり開く伊達。

扉を開けてすぐに店の中を掃除する比奈と鉢合わせになり、伊達は

「よう!」と手を挙げた。

「あら伊達さんいらっしやい!お1人ですか?」

「いんや。里中ちゃんと…あと泉とアंकもいるぜ。」

「え?お兄ちゃんとアंकも?もうあの2人…お店ほったらかしてゝ!って、あれ?映司君は?」

「あ…。」

しまった、と伊達は頭を抑えた。

これでは自分が話さないといけないパターンだ。

信吾とアंकが『ざまあみろ』とでも良い足そうな顔で店の中をこそと見ていたら2人とも追加で比奈に見つかり、映司達の事を話さざるを得なくなってしまった。

気配を感じ取り、映司と後藤が向かった先は……洛芦和唯一の教会。  
その前で、2体の怪物が暴れ回っていた。

一体はモグラの様な怪物……もう一体は大きなトラの様な怪物。

間違い無い……今朝と同じ怪物だ。

ロスト・チャイルド  
『はぐれ眷属』……当然ヤミーでは無い。

ヤミーならばまだ救いがあっただろうが残念ながら違う。

しかし倒さない訳にも行かないので、2人はそれぞれのベルトを腰に巻きつけた。

「やはりヤミーでは無いか……。」

「仕方ないですよ。……行きましょう！」

「ああ！」

2人は顔を見合わせ、映司はケースからコアメダル……後藤はメダリックユックからセルメダルを取り出し、ロスト・チャイルドを目の前に同時に叫んだ。

「「変身ッ！」」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タッ！トッ！バッ！  
』

『カポーンッ！』

映司はコアメダル3枚の力を纏い仮面ライダーオーズへ、後藤はセルメダルの力を纏い仮面ライダーバースへと変身。

メダジャリバーとバースバスターをそれぞれ構え、2人は分散して一体ずつ相手をする事に。

まず、バースはトラのロスト・チャイルドと対峙。

体格差は圧倒的：勿論悪い意味でだ。

それでもバースは怯んだりなどしない。

冷静に相手の動きを分析しながらロスト・チャイルドの攻撃をかわし、的確にバースバスターで攻撃。

しばらく銃撃で対応するが、分析が終わり格闘戦が有効だとわかると、彼はリュックからセルメダルを取り出してバースドライバーへと投入。

ハンドルを一気に回し、CLAWS装備を発動させた。

『カポーンッ！ショベルアーム ドリルアーム』

左手に『ショベルアーム』、右手に『ドリルアーム』を装備すると、バースは向かってきたロスト・チャイルドをそれで押し返す。

更にショベルアームでロスト・チャイルドを掴み上げると、ドリルアームで胸を突きぬいた。

バースが優勢で戦っている隣で、少しばかり苦戦しているオーズ。

何せ相手はモグラのロスト・チャイルド：地面に潜り、攻撃の時にしか出てこない。

中々隙が出来ず、オーズは何か無いかと考える。

メダルケースの中で……これに対抗できるメダルは…、

「これだ！！」

使うメダルを決めると、オーズの複眼が紫色に光り、彼は地面から最強武器『メダガブリュー』を取り出した。

タカとトラのメダルを抜き取ると、代わりのメダルをバックルへ挿入し、コンボチェンジを発動。

『シャチ！ゴリラ！バツタ！』

目の前に青と灰色のオーラングサークルが新たに出現してオーズに重なる。

すると彼の姿は上から『青・灰・緑』の亜種形態『シャゴリバ』へと変わった。

シャチの能力で地面の中を探り、ロスト・チャイルドの動きを待つ  
オーズ。

そしてとうとう、敵が動いた。

出てくる場所に標準を定め、メダガブリューを一気に振り下ろす。  
すると…、

『グオオオオオオオオオオ!!!!』

案の定クリーンヒット。

地面の上に倒れた事を確認すると、オーズとバースは並び立ち、必殺技発動の準備。

その際、**バース**は**シヨベルアーム**だけを解除。

『スキヤニングチャージ!!』

『セルバースト』

「せいやああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」  
「はああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

オーズの『バゴーンプレッシャー』がモグラの、バースの『ドリル  
アームアタック』がトラのロスト・チャイルドにそれぞれ命中。  
2体のロスト・チャイルドは悲痛な叫びを上げ、跡形も無く砕け散  
った。

完全に倒したと確信し、2人とも変身を解除。

跡形も無く消えたので、食料にはならない。

「はあ：はあ：これじゃ手掛かりにはならないな…。」

「ですね……。どうしましょう……。」

信じない。

『和葉！ちょっと待ってよ和葉！！』  
「…………ツ！！」

「…………ツ！！」

信じれるはずが無い。  
どうして兄が？  
神？

機巧魔神？

仮面ライダー？

何で自分の兄がそんな物に巻き込まれなきゃいけないのか！？

ありえない……ありえないありえないありえないありえない……あつて良いはずが無い。

「何で……！！どうして……！」

そんな事を思いながら、和葉は当ても無く町中を走り回っていた。咲華もそれに追いつこうと必死に追いかけるが何故か距離が縮まらない。

和葉は元々運動神経が良いが体力は虫けら並み……大抵1キロも走り続けたらすぐにダウンする。

それが何故か今日に限ってずっと走ってられる……それだけ頭が一杯なのだろう。

と、思うと今度は急に立ち止まり……和葉はその場にペタンと座り込んでしまった。

顔はグジュグジュに泣き潰れており、目は赤く腫れ上がっていた。

『か……和葉……？』

「どうしてなの……？何で……？何でお兄ちゃんが？どうしてお兄ちゃんなの！？世界を救う……？そんなの関係無いよ……だって、あの日約束したもん……！鳴桜邸と一緒に暮らそうって……！それなのに何で！？ねえ、何で……！！？誰でも良いから答えてよ……！！」

『和葉……智春さんは……。』

咲華は何故和葉がここまで智春に依存するのか……その理由を知っている。



いや、知っているというより…彼女が原因と言っても過言では無いだろう。

何か言わなければ…そう思うのに口が動かない。

手も、何もかもが和葉に伝える事を拒否している様な気がする。

そして、和葉はポツリと言、呟いた。

「会いたいよ…………お兄ちゃん…………。」

「その欲望、解放してやる。」

チャリン…！

頭の中に、そんな音が響いた気がした。

すると彼女の中の何かが蠢き、それが彼女の中から溢れてくる。

『欲望』…そう、それは彼女の欲望の権化…、

『アイタイ……ア、イタイ……イイ！！』

それは、怪人ヤミーが初めて『二巡目の世界』に誕生した瞬間だった。

## メダルズ5：真実と嘘と和葉の欲（後書き）

感想待っています。

## メダルズ6…ヤミーと歯車と奇跡のコンボ（前書き）

『オーズクライン〜玻〜』、前回までの3つの出来事！！

1つ、和葉が兄失踪の真実を知る！

2つ、映司と後藤の前に再びロスト・チャイルドが出現！！

そして3つ、和葉の欲望からヤミーが誕生した！！！！

## メダルズ6：ヤミーと歯車と奇跡のコンボ

「会いたいよ…会いたい…。」

『アイタイ…アイツ…タイ…!!』

『か…和葉アンタ…!!』

咲華はあまりにも想定外の事態にただただ絶句していた。

いつもならこのまま帰宅して明日の準備をして、蕎香と携帯でおしゃべりして、後は自由に過ごして寝るだけという『日常』があったはず。

しかし…彼女の『兄に会いたい』という『欲望』が…そのあるはずの『日常』を『非日常』へと変えてしまった。

人々の『～したい』、『欲しい』、『～だったらいい』と言った心の底に秘める想いを糧とした異世界の怪人『ヤミー』<sup>欲望</sup>

和葉が持つ、異次元へと消えてしまった兄、夏目智春へ会いたいという想いが生んだ『世界の異物』だ。

異物<sup>ヤミー</sup>は和葉の持つ欲望を口にしながら、辺りをキョロキョロと見回している。

ヤミーと同じ様に和葉も辺りを見回すと、2人は咲華を無視して歩き出した。

いや、無視しているというより…まるで『いない』と思っているかの様。

「会いたい…。」

『アイタイ…。』

「ま、待って和葉! 和葉!!」

彼女は必死に和葉を呼び止めようとするが、無意味。  
咲華では和葉に触れる事は出来ないし、話しかけても声が届いていない。

『和葉――！！！！』

「……………何？」

よし、声は聞こえている。

いつもの和葉からは想像も出来ない程冷たい声を放っているが、咲華はそれに恐れずに彼女へ呼びかけ続ける。

『和葉バカな事やって無いで帰るわよ！！そんな気持ち悪い奴なんか…、』

「邪魔しないで。」

『か…ず、は…？』

和葉がそう言うと同時に、ヤミーは腕を振り上げて咲華を威嚇。  
絶対に当たらないとわかっているにも関わらず、咲華は反射的に目を瞑ってしまった。

その間に和葉とヤミーはいつの間にか姿を消しており、何が起きたか分からずに咲華はその場でオロオロとしてしまう。

（そんな…私と和葉はそんなに遠く離れられないはずなのに……  
あの怪物のせい…？）

『大変だ……ど、どうしよう……和葉……あ。』  
思い出した。

あの人達なら……仮面ライダーなら……もしかしたら和葉へ手を伸ばしてくれるかもしれない……。

今の自分は和葉から離れられる……あの2人を探す事が出来る……。  
仮面ライダーオーズ 仮面ライダーバース  
火野映司と後藤慎太郎を……。

『映司さん……後藤さん……!!』

「あれ？」

「どうした？」

「いや何か……誰かに呼ばれた気が……。」

その頃映司と後藤……2人とも野宿しようと思い、近くにあった公園で焚き火を焚いていた。

安定で安心のクレーンアームで魚を捕らえ、焼き魚にして戴く事に。  
今日は何とか乗り切る事が出来た……問題は明日以降。

一体いつまでこんな事続けなければいけないのか……そう思うと映司も後藤も気が滅入る……。

特に後藤なんてぶつぶつと『伊達さん……里中……会いたい』……とか呟いていて若干キモイ。

いや、映司も『……比奈ちゃん……信吾さん……知世子さん……ああ、あとついでにアंक……。』と呟いていて十分キモイが。

「気のせいだろ。色々あって……幻聴でも聞こえたんじゃないのか？」

「ですかね……？……何ていうか、妙にリアルな幻聴だったなあ……。」

「……もしかして『紫』か？」

「……かもしれません。」

「火野、わかっていているとは思うが…、」

「わかってますよ。『コレ』での変身は極力抑えます。俺にはアンクが残してくれたメダルがあるし。」

「ならいい。俺も全力で支援s……あれ？」

「どうしたんですか？」

何故か魚を手を取っている後藤の顔が青くなった。

彼が魚を持っているのは右手、左側においてあるメダルリュックの上に乘せている左手がピクピクと何か焦っている様に小刻みに震えていた。

この焦り様は例えるなら…そう、アレに似ている…。

バースが弾切れを起こした時のアレに。

もしかして…？ 恐る恐る後藤のメダルリュックの中を映司が覗き見ると、その考えが正しかった事が完璧に立証された。

メダルが無い。

全部無い、一つも無い、埃ならある。

どうやら魚釣りで全部使い切ってしまった様だ。

そう言えばここに来るまでの間にまたロスト・チャイルドに襲われてドリルアームのセルバースト超強化を使った。

その時にほとんど使い切った挙句、釣りでとどめをさしたらしい。

コレにはとうとう後藤もどん底まで落ち込んだ様で、体操座りしてぶつぶつ何か唱えている。

確かにここでメダルが手に入るとは思えないので無理も無いが。

「俺がバース俺がバース俺がバース俺がバース俺がバースおr（r  
y」



「ご、後藤さん元気出してください…俺の魚上げますから!」

「どーせ俺なんて里中がいなきやすぐにメダル使い切るバースだよ……どーせ伊達さんより酷い戦い方（byアंक談）だよ…。」

「あ、…ハハハ…はあ…。」

初日からこの調子じゃ先が思いやられる。

どうした物か…そう思っていると、映司の耳に甲高い声が聞こえた。聞き覚えのある声…立ち上がって目を凝らしてみると、少し離れた位置から色素の薄い少女がフワフワと宙に浮かんで映司達の名を叫んでいるのが見えた。

「あれ…?もしかして…咲華ちゃん…?」

『!… え、映司さん!!後藤さん!!』

映司の存在に気が付き、若干涙目で彼らに駆け寄って…否、飛び寄って来る咲華。

前に見たクールで強い印象の彼女の姿は無く、そこには今にも泣きそうな程辛そうな表情をした幽霊の少女の姿があった。

程なくして後藤も歩み寄って来て、咲華は2人に先程の経緯を話す。和葉から突然、白いミイラのような怪人が出てきた事を。

「!? まさか…ヤミー…!?」

『やみい?』

「馬鹿な…まさか本当に!?!」

「咲華ちゃん、本当に和葉ちゃんからその怪物が出てきたんだね?」

『は、はい。』

「よし……だったら…!?!」

胸に手をあて、感覚を研ぎ澄ませる映司。

すると彼の瞳が紫色に光り、映司はある一点の方向を見つめて走り

出す。

「こっちだ!!」

『え? ちょ、ちょっと映司さん!?』

「大丈夫だ咲華ちゃん。火野を信じる。」

『は……はい……』

走っていく映司を追う為に後藤はライドベンドーを起動……させたかったがメダルが無い為、仕方なく彼と咲華も映司を走って追いかける事にした。

『ウウ：オマエガナツメトモハルカ……!?』

「ち、違う!…違う!!」

和葉から生まれたヤミーはその頃、高校生ぐらいの男を見るとほぼ無差別で襲っていた。

その時には決まって『お前が夏目智春か?』と聞き、『違う』と答えると殴り飛ばされる。

当然『Yes』と答える者などいるはずも無く、すでに数分の間にヤミーは5人もの人間を襲っていた。

そして、生みの親である和葉はそれを心が宿らない瞳でジッと見つめるだけ。

『ドコダ……ナツメトモハルハドコダアアアアアアアアア!!』

「「和葉ちゃん!!」」  
『和葉!!』

その時…和葉を呼ぶ声が。

それが映司と後藤、そして彼女の片割れである咲華だと気付くのにそんな時間は掛からなかった。

しかし、それに気付いた所で和葉が何をするわけでも無い。

彼女はただ、ヤミーが人を襲うのを見るだけ。

「なっ…本当にヤミー!? 一体誰の…!?」

「だがまだ白ヤミーだ…あれなら倒すのには苦勞しない。火野、悪いが…。」

「分かってます!」

後藤も一応拳銃を持っているが、ここはやはり変身できる映司が戦うべきだろう。

オーズドライバーを腰に巻き付け、赤・黄・緑のメダルを手取る。

『和葉!! 映司さん達連れて来たよ!! 和葉!!』

「邪魔しないで咲華…私、今お兄ちゃん探してるの…。」

『和葉…あ、アンタ馬鹿なんじゃ無いの!! あんな方法で見つかるわけ無い!』あっ…。」

「……。」

やってしまった。

今の和葉に『見つからない』は禁句。

そして、その彼女の思いを受けたヤミーは咆哮を上げ、咲華へと襲い掛かってきた。

当然当たるはずは無い…わかってる…だから避けない…。

しかし…

『キャアッ!!』

ズバッ!!という大きい音と共に、咲華の腕に赤い染みが広がった。恐る恐る自分の腕を触ってみると、異常な激痛が襲ってくる。

まさか幽霊の自分が怪我をするなんて……この怪物、普通じゃ無い。<sup>ヤミー</sup>

『怖い』

この感情を感じたのは今まで和葉を失うという事以外では初めてだ。痛い…心も体も…。

それを見た映司はオースキャナーを手に取り、オーズドライバーに挿入したメダル3枚を読み取らせた。

「変身!!」

『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タトバ!タッ!トッ!バツ!  
!』

3枚のメダルの力を正面から纏うと、映司は仮面ライダーオーズ  
タトバコンボへと姿を変える。

再び咲華に襲い掛かろうとするヤミーを押しつけ、トラクローを展開させた。

『グウ…!オマエガナツメトモハルカ…?』

「違う!俺はオーズ…仮面ライダーオーズだ!!」

『カメンライダー…?クロ…ガネ…?』

「？ 何だこのヤミー…いつもと感じが違う…？」

普通ならば成長した段階で誰のものかわかるヤミーだが、オーズは特例で体内のメダルの力を使う事で成長前でもそのヤミーの種類を知る事が出来る。

だが、今回はそれが出来ない…何故か紫のメダルの力を受け付けてくれない…。

それに先程ぶつかりあった時にも違和感を感じた。

どう考えてもあの力は白ヤミーが出せるものではない…強すぎる。少なくともタトバコンボのオーズと同等ぐらいはある。

「火野油断するな！！！」

「わ、わかってます！！後藤さんは2人を！！」

「了解した！！行こう2人とも！！」

『和葉いこ！和葉あ！！』

「……うるさい…。」

「和葉…ちゃん？」

「うるさいうるさいうるさいうるさい…うるさいうるさいうるさいうるさい！！うるさああああああい！！！！！！！！」

ドンッ！！と、思いっきり後藤を突き飛ばす和葉。

頭を抱え、離れるどころか寧ろヤミーとオーズの戦っている場面に徐々に近寄っていく。

「私は会うの!!! お兄ちゃんに会うの!!! 絶対…絶対に会うんだから!!!」

『和葉…智春さんは…!!!』

「『お兄さんに会いたい』…もしかして、それが和葉ちゃんの『欲望』…?」

和葉の叫びと共に、ヤミーは更に力を上げた。

トラクローを展開したオーズを押しつけ、自らも咆哮を上げる。

すると、ヤミーの体に徐々に輝が入り、体が鋼色に輝きだした。

体の中でジャラジャラという音が響き、その形状を徐々に変えていくヤミー。

足は機械人形のような多重関節を設けられ、腕はロボットアームの様にイビツで強靱な物へ。

体も硬そうな鉄でコーティングされ、頭には所々『歯車』を飾られている。

『会いたい…オーズ、邪魔を……するなああああああ!!!!!!』

「ぐっ…!!!」

成長したヤミーは先程とは比べ物にならないぐらい強力なパンチをオーズへと叩き込む。

それを何とかオーズは受け止めるが、かなりのダメージを喰らってしまった。

強い…いや、それよりも…こんなヤミー見た事が無い。

本来ヤミーは『赤の鳥』、『緑の昆虫』、『黄色の猫科』、『灰色の重量系動物』、『青の水棲生物』、『紫の恐竜・幻獣系』に分けられる。

しかし今日の前にいるのは『鋼色の無機物』…どう見ても彼らの知

るヤミーでは無い。

それには後藤も驚いている様で、同じ様に咲華も怪物が成長した事に驚いていた。

だが和葉は驚いていない…寧ろ、少し笑っていた。

この強さと洗脳力…そして無機物。

『ハグルマヤミー』とでも言えるこのヤミーは何もかもが異例の異端。

当然オーズの並の攻撃は通用せず、メダガブリューですら通らない。

「もう止めてよ…。」

『か、和葉…？』

「もう私に関わらないでよ…映司さんも後藤さんも、咲華も。皆傷つく…皆壊れちゃう…。」

「和葉ちゃん…俺たちは…。」

「分かってるよ！！もうお兄ちゃんに会えないって事ぐらい！！わかってる…わかってるけど…！！」

先程までの、まさに無機物とも言える表情から一片、感情を剥き出しにして涙混じりに叫ぶ和葉。

あまりにも痛々しいその姿を、咲華は見ている事が出来なかった。

後藤も唇を噛み、拳銃を握りしめるだけ。

だが、1人だけ……ただ1人だけ和葉へ声を掛ける者が。

「大丈夫だよ、和葉ちゃん…。俺が何とかする…俺を信じて…！！」

オーズだった。

『オーズの世界』

「そんな…映司君と後藤さんが…。」

信吾と伊達から昼間の一部始終を聞かされ、比奈は軽く放心状態になってしまった。

それはそうだ、何せ今朝まで一緒にいた人が行き成り『変な空間に飛ばされた』と来たもんだ。

これを伊達が説明するなら、多分彼女は信じなかっただろう。だが信吾とアंकと一緒にそんなしょうも無い嘘をつくとも思えない。

つまり事実…それを理解すると比奈は顔を俯かせた。

「俺たちも会長に聞いたりしてみたんだけど…これがまたさっぱりでねえ。」

『嘘付け!!聞いたの俺だろうが!!』

「あの場に俺もいたんだし、俺が聞いたも同じって事で☆」

「まあまあ2人とも。」

「お兄ちゃん達は…どうするの?」

「そうだね…とりあえず、当面の間ヤミーは俺たちと伊達さんで何とかするつもり。映司君達が戻ってこれる方法も探す。比奈も協力してくれるかな?」

「……信じて、いいの?」

「俺が今までお前に嘘ついた事があるか?」

「……無い。」

「だったら俺を信じろ比奈。俺が何とかする…俺を信じて!」



「…うん。わかった、信じるよ！」

「信じれないよそんな事！！だって…私達まだ会って半日程度なんですよ！！そんなアナタの事、どうやって信じろっていうんですか！！！！」

やはり咲華と後藤の予想通り、和葉はオーズを信じてはくれなかった。

しかし、それでも彼は手を伸ばす事を諦め無い。

オーズは戦いながらも和葉へと手を伸ばし、必死に彼女へ呼びかけ続ける。

「俺と一緒にお兄さんを探す！！一緒にお兄さんの帰りを待つ！！君1人じゃ届かない手も、俺の手と合わせてどこまでも届かせる！！」

「それでも無理な事はわかってるもん！！だってお兄ちゃんはどうも…この世界にいないんだから…そんなの奇跡でも起きない限り絶対に叶わない！！！奇跡なんて、あるわけが無い！！！！」

「……あるよ……奇跡って……」

「へ……?」

仮面の下で優しく笑いながら、オーズは新たなメダルを2枚抜き取る。

少しの間メダガブリューを降ろし、クルッと和葉へと振り返った。

「俺達が過ごしている日常……俺達がこうやって巡り合えたこの一瞬一瞬が、もう奇跡なのかもしれない……。だから、奇跡はあるんだ……この手、まだまだ君に届く……。だから……だから、和葉ちゃんも絶対に諦めちゃダメだ!!!!」

「もう……この瞬間が奇跡……?」

「俺は奇跡を信じる……コイツに、そう教えられたから……!!」  
そう言って、オーズが和葉に見せたのは先程取り出した新たなメダル。

オーズはオーズドライバーの位置を元に戻し、トラとバッタのメダルを抜き取った。

先程取り出したメダル2枚をそれぞれ抜け落ちたスロットへと投入すると再びバックルを傾け、オースキャナーを手に取り……3枚のメダルを勢い良くスキャンした。

メダルをスキャンする音が軽快に響き渡り、オーズの眼前に3つのメダルの幻影が出現。

『タカ!』

するとオーズの頭部だった『タカヘッド』が赤い炎を撒き散らし、紅蓮の力を灯した『タカヘッド・ブレイブ』へ変化。

『クジャク！』

続いて黄色かった『トラアーム』には虹色の波動が纏い付き、両肩が大きく開き空の力を宿した『クジャクアーム』に。

『コンドル！』

3番目に緑の『バッタレッグ』はあらゆる物を切裂く力を持つ『コンドルレッグ』へと変わっていき、オーズの姿は足の先から頭の天辺まで全てが灼熱の『赤』に包まれた。

『タ〜ジャ〜ドル〜！！』

最後に全てのメダルの力が混ざり合い、他の形態とは異なる一匹の

『不死鳥』の紋章を描いたオーリングサークルがオーズへと重なり、  
彼はその強大な力を虹色の翼と共にはためかせた。

『仮面ライダーオーズ タジャドルコンボ』

『奇跡のコンボ』が『二巡目の世界』に降臨した瞬間だった。

## メダルズ6：ヤミーと歯車と奇跡のコンボ（後書き）

現在人気投票受付中！！

詳しくは自分の活動報告で！！

## メダルズ7：復活と分け合い精神と謎のセル（前書き）

『オーズクラインく破く』、前回までの3つの出来事！！

1つ、和葉から生まれたヤミーとオーズが対峙！

2つ、そのヤミーは『ハグルマヤミー』という全く新しい謎のヤミーへと進化！！

そして3つ、オーズは赤いメダルを使い『奇跡のコンボ』タジャドルへと変身した！！！！

## メダルズ7…復活と分け合い精神と謎のセル

『タカ!』

和葉を助けるため……、

『クジャク!』

この『二巡目の世界』に…、

『コンドル!』

降臨した赤き不死鳥の戦士…、

『タ〜ジャ〜ドル〜!!』

仮面ライダーオーズ タジャドルコンボ。

別名『炎のコンボ』とも『奇跡のコンボ』とも呼ばれるオーズの最強形態。

赤き紅蓮の翼をこの世界に広げ、数々の欲望から生まれし謎の怪物

：ハグルマヤミーと対峙する。

敵は今までに見ない全く新しいタイプ：どの形態が通用するかわからない、だからこのコンボを選んだ。

元の世界での彼の最高の相棒の力を宿したコンボ：それは間違いなく、『紫』なんかよりもずっと強いオーズの最強形態ともいえる。

オーズは中心のオーラングサークルより出現した専用武器『タジャスピナー』を前に向けると、ハグルマヤミーと一定の距離を取った。そして、夜風が戦いを見守る後藤や咲華達の頬を冷たく撫でるのを合図に：2人は一気にお互いに向けて走り出した。

ハグルマヤミーは両手から鋸状の歯車弾を何発もオーズに繰り出すが、オーズはそれをタジャスピナーから放つ火炎弾で打ち消していく。

タジャドルコンボへと覚醒したオーズの火力はすさまじく：今までタトバコンボでは全く歯が立たなかったハグルマヤミーの歯車弾をいともたやすく溶かしていく。

それに対してハグルマヤミーは一瞬たじろぎ、その隙にオーズは急接近して炎を纏った左の拳をハグルマヤミーへと叩き込んだ。

耐え切れずにハグルマヤミーは10歩ほど後ろへと飛ばされ、そこへオーズは更にメダジャリバーを装備。

クジャクの羽を目いっぱい広げ、そのままハグルマヤミー目掛けて必殺技を放った。

『スキヤニングチャージ!!』

「せいやあああああああああああ!!!!!!」

必殺『コアチャージスラッシュ』がハグルマヤミーへと命中。

全コンボ中最速の一撃を、当然ハグルマヤミーは少しもかわす事が出来ずに直撃。

『ぐっ……ああ……!?!』



「はあ：はあ：はあ：！！！」

オーズがまるで侍が刀に付着した血を払うようにメダジャリバーを振るうと……ハグルマヤミーは悲痛な叫びをあげて爆散。

辺り一面にセルメダルが散らばり……ハグルマヤミーは跡形もなく消滅した。

それと同時に和葉が倒れ、彼女が地面につかない様に後藤が地面すれすれで彼女をキャッチ。

しばらくして和葉は目をさまし……辺りを見回した…。

「ん……ん……？」

『か、和葉！！和葉しつかり！！』

「咲華……？あ……あの怪物は！？」

起き上がり、ハグルマヤミーの姿を探す和葉。

しかしハグルマヤミーは何処にもおらず、彼女はホッと胸をなでおろした。

「よかった……何なんだろうあの怪物……どこから出てきたのかな……？」

「『え？』」

その言葉に、咲華と後藤が疑問を持った。

咲華の話だと、和葉は自分からヤミーが生まれた事を自覚していた。それが今になってとぼけるとも思えない……もしや、ヤミーがいた事以外忘れているのかもしれない。

だがそれならそっちの方がいい……彼女の性格ならきつと、ヤミーが自分から生まれた事を知ると思い詰めてしまうだろう。

「後藤さん！和葉ちゃんは！？」

「ヤミーの記憶が一部消えているが問題無い、大丈夫だ。」  
心配して駆け寄ってくるオーズ。

和葉の無事を確認すると彼も胸をなでおろし、変身を解こうとオーズドライバーに手を掛けた。

その時だった……、

『……ぎ、ギギ………ッ。』

『オーズの世界』

『セルバースト』

「うおりゃあああああああああ！……！！！！！！！！！！」  
「『はあああああああああああ！……！！！！！！！！！！』」

プロトバースの必殺技『ガーディアンシュート』とアंक完全態の必殺技である『プロミネンスドロップ』がほぼ同時に敵である『トロサウルスヤミー』に激突した。

これはグリード勢のリーダー（？）である真木博士より生まれたヤミー……しかし、プロトバースとアंकの至近距離からの攻撃を同時に喰らって生き残れるはずが無い。

当然ながら、トロサウルスヤミーは完全消滅。

その場にはセルメダルが一枚だけ残り、プロトバースとアंकはほぼ同時にそのメダルへと飛びかかった。

「俺のが先に命中しただろ！！あれは俺の稼ぎだ！！」

「っざけんな！！あんな蚊みたいな攻撃で紫のヤミーが倒せるか！

！俺のメダルだ！！」

「お前は帰ってアイスでも喰ってりゃいいだろ！！だからあのメダルは俺がもらう！！」

「おいコラ！！てめえ焼くぞ！！！！」

『「「いい加減にしてください。」」』

たかがセルメダル一枚のためにここまで喧嘩できる2人を見かね、信吾がアंकから分離、里中はプロトバース押さえつけ、比奈が2人を突き飛ばした。

それによりプロトバースは変身解除、アंकも信吾が離れたので腕だけの姿に戻る。

「2人とも子供じゃないんだから！」

「伊達さん、会長との『アंक君との連携が出来ないようならば報酬は少し値引きさせてもらおうよっっ！！！！！！』という約束、お忘れですか？」

「あー…そりゃ勘弁だ。わりいね里中ちゃん、この事あ会長には黙ってて頂☆戴！」

『ふんっ………今のうちにあのメダルを……、』

「アंक？」

とりあえず比奈が怖い。

映司達が帰るまで彼女もサポートするとは言っていたが……成程これはいいサポートになる（おもにアंकへの制裁として）

「まあまあ2人とも、もう少し『分け合い』の精神を磨こうよ。人

もグリードも、1人だけじゃ生きてはいけないんだしさ……今回のこのメダルは俺達よりも先にヤミーと戦ってた伊達さん達に譲る、で、今回みたいな事がもしかたあればその時は俺達がメダルをもらう……2人ともそれでいいね？」

「『……………』」

「返事は？」

「OK。」

「アंक返事は？」

『……………ちっ。』

「OKだね、じゃあ比奈、メダル伊達さんに渡して。」

「うん。わかったお兄ちゃん。」

さすが信吾……伊達に警官やってない。

この立場がもしも後藤だったら……伊達は制圧できてもアंकを制圧できなかっただろう。

ちなみに彼らがこうしてヤミーを倒すと、その報酬として鴻上ファウンデーションから生活の支援金がわずかながら送られてくる。

一応これで信吾にもちゃんと戦う理由が生まれる……彼曰く『お金貰っている立場で偉そうな顔でメダルも貰ってはいけない』らしい。口座振り込みなので今日はもうそのまま帰る予定。

アंकは少し散歩すると言って腕だけで何処かへ行った……そのうち帰ってくるだろう。

岐路へ着く泉兄弟とバスチーム……アंकはそれを見届けると1人フヨフヨと動き回りだした。

（こっちの方か……？）

今回アंकが1人で行動しているのには理由がある。

そもそも今日は何故、伊達達にヤミーの気配を先取りされたか……それとおそらく同じ理由。

『妙な気配がする』

グリードでもヤミーでも、どの気配でもない。

確かこれは……そう、約1年ほど前に戦った『仮面ライダーコア』の気配に似ていた。

信吾や比奈にばれるとたぶんあとが面倒くさいだろうと思い1人で来たが…

(……………雲行きが怪しい……………一雨くるのか?)

『チツ……濡れるのは勘弁だ。仕方無い、帰るか……。』

そう呟き、アंकも岐路についた。

その日は彼の予想通り激しい大雨が降り、その夜……激しい雷が轟いた。

「そ……そんな……!?!?」

「馬鹿な……!?!?」

オーズと後藤は、今信じられない光景を目にしていた。

それは……セルメダル。

何と先ほどまでハグルマヤミーを構成していたセルメダルの山の一部が、まるで意志を持っているかのように動き出し、再び固まり始めたのだ。

動いているセルメダルを何とか捉えようと後藤はメダルに飛びつき、そこから何枚かメダルを筆記取ったがすぐに塊からはじかれる。

しかしそれでもメダルが手に入った事には変わり無い為、バースドライダーを腰に巻きつけていつでも変身できる体制に。

「!!」

「どうしたんですか後藤さん？」

「……………火野、これを見てみる……。」

「え……………これって……!？」

持っているセルメダルに違和感を抱き、後藤はそれをオーズに見せた。

後藤の掴んでいるメダルは8枚……そのうち4枚には彼らの知っている『クジャク』、『カマキリ』、『プテラ』、『チーター』の絵柄が刻まれている。

しかし、もうあと4枚には……彼らが全く見た事の無い絵柄が刻まれていた。

『ハグルマ』、『クサリ』、『ジシャク』、そして『ガラス』

これらはどう見ても普通じゃない……その証拠に、再びひき集められているセルメダルは全てこの『無機物系』のセルメダルばかり……。メダルが再構成されて再びその姿を見せたハグルマヤミーは大きな咆哮を上げると、オーズをギロツと睨んで突進を仕掛けてきた。

「くっ……………得体のしれないメダルだが……この際やむを得ない!!…変身!!」

『カポーンッ!』

『ガラス』が刻まれたセルメダルをベルトへ挿入し、後藤は仮面ライダーバースへと変身。

ハグルマヤミーを取り押さえると、動けない様にながちりと抑え込む。

「火野!! やれ!!!」

「はい!!!!」

『タカ! クジャク! コンドル! ギン! ギン! ギン! ギガスキャン!』

バースから渡されたセルメダル4枚とベルトにはめ込んだ3枚の赤いコアをタジャスピナーへ装着し、ギガスキャンを発動させるオーズ。

赤い炎を纏いながら、メダジャリバーを握り…オーズはハグルマヤミーへと斬りかかって行った。

『マグナブレイズ』の応用技である『マグナスラッシュ』だ。

先と同じようにハグルマヤミーを一閃に切り伏せ、オーズはギガスキャンを解除。

倒したはずのハグルマヤミーの方を見ると……、

『ギギギ……夏目智春……何処だ……!!!!!!』

「「生きてる!?!」」

まさかの生存。

確かこの技は『コアチャージスラッシュ』なんかよりもずっと強力な技のはず…まさか復活した事で強度が信じられないほどあがっているのだろうか？

オーズ タジヤドルコンボの攻撃をもらってもしないハグルマヤミーは、更に鋭くなったハグルマ弾を何発も何発もオーズへと食らわせる。

「うわあああああああ！！！！！！！！」

「ひ、火野ッッ！！！！！！」

先ほどまでのダメージ、異世界トリップの精神的疲労、コンボの長時間使用、そして新たにハグルマヤミーの強力な攻撃が加えられたことで、とうとうオーズは変身解除。

映司の姿に戻り、和葉の足元に転がった。

「え、映司さん！！映司さんしつかり！！」

『ダメよ和葉ゆさぶっちゃ！！危険だわ！！』

「和葉ちゃん咲華ちゃん！！火野を頼む！！こいつは俺が倒す！！！！」

『カポーンッ！カッターウイング』

背中に飛行ユニット『カッターウイング』を出現させると、バースはそれを右手で掴んで剣のように持ち、ハグルマヤミーへと斬りかかった。

これはグリッドですら切り裂ける程の切れ味を持つ…しかし、それでもハグルマヤミーはびくともせず、簡単に弾き返される。

バースバスターで徐々に相手を削りたいところだが、弾丸にする為のセルメダルは無く…残りは一枚だけ。

やるとしたら…『セルバースト』抜きのブレストキャノンぐらいか



……だが、オーズのギガスキャンで倒せなかった相手、その程度で倒せるかどうか知らない……というか倒せない。

それでもバースはカッターウイングを握りしめ、それを再び背中に装着すると、カッターウイングの出力を最大にしてハグルマヤミーへと突進を仕掛けた。

「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

『無駄だ!!!!!!』

両手を前に突出し、バースを受け止めるハグルマヤミー。

まだカッターウイングは死んでいない……このまま押し切れる……。

だがやはり力は相手の方がはるかに上、カッターウイングは徐々に勢いを落としていき……バースの体が少しずつ下へと下がる。

(まずい……このままだと俺まで……!!!!!!くそっ……どうすれば……!!!!!!)

「焰月!!!!!!!!!!」

その時、何者かがハグルマヤミーの腕を真つ二つに切り裂いた。突然の事に何が起こしたのかわからないハグルヤヤミーとバース。

バースはカッターウイングで体制を立て直すと、辺りを見回し、木の上で彼らを見下ろす1つの影を発見した。

黒い美しい髪に抜群のスタイルに朱色の炎の剣、そして緑色に輝く2つの眼を持った洛高制服の少女。

彼女はシュタツ！と木の上から降りてくると、バースの隣に並んだ。

「き、君は……！？」

「……どうしてまた仮面ライダーがこの世界に来ているのかは知りませんが……好都合です。」

「！？ 君は仮面ライダーを知っているのか！？」

「とにかく今は逃げましょう。煙幕お願いします。」

そう言うと少女はバースの手の上に数枚のセルメダルを置いた。

ハグルマヤミーの腕を切り裂いた時のものだ。

あれ程の強度を誇っていたハグルマヤミーの腕を切り裂くなど……

あの剣、一体どれほどまでに強力なのだろう？

「た、嵩月先輩……？」

「和葉さん、それに咲華さん。その方も連れて逃げますよ。お願いします。仮面ライダー！」

『カポーンッ！ブレストキャノン』

バースドライバーにセルメダルを投入し、バースは胸部に巨大な大砲ブレストキャノンを装備。

セルバーストしなければ威力は弱いが……地面に放てば……

「シューーーーーー！ト！！！！！！！！」

『ぐっ！？』

攪乱にはかなり使える。

爆炎と煙幕でハグルマヤミーの動きが封じられている今がチャンス。バースは後藤の姿に戻ると映司を背負い、和葉達と共にその場を離れていった。

## メダルズ8：説明と科学部員と紫メダル（前書き）

『オーズクラインく破く』、前回までの3つの出来事！！

1つ、タジャドルコンボになったオーズがハグルマヤミーを撃破！  
2つ、しかしハグルマヤミーは謎の復活を果たしオーズとバースを  
奇襲！！

そして3つ、2人のピンチに、嵩月奏が現れた！！！！

メダルズ8..説明と科学部員と紫メダル

目の前がもやもやしていた。

真っ暗で何も見えない：そんな空間に一人たたずんでいた火野映司。辺りを見回しても誰もおらず、本当に一人ぼっちだった。

ここは一体どこだろう…？

しばらく歩いてみるが何も見当たらず、声を出して叫んでみる事にする。

└

叫んだ：しかし、ここでは自分の声すらまともには聞こえず、一体誰に対して叫んだのかわからない。

もう一度試してみるがやはり同じ：何も聞こえずに何も返ってこない。

これはまるで……前にグリッド化して暴走した時の感覚に似ている……。

そうして映司が考えていると……彼の前に、『何か』が現れた。

「グオオオオオオオオオオオオ……！！！」

紫色の『ソレ』は、だんだんと姿をはつきりとさせていき…やがて映司の前にその巨大な姿を現した。

巨大な翼を持った頭部に、強靱な剛腕、そして巨大な尾を揺らす脚部…。

[illegible]

そこには恐竜系グリード：『プトティラ』が吠えながら映司に向かって巨大な爪を振り下ろしていた…。

「うわあ  
あああああああああ  
!!!!!!」

そんな夢を見て、映司はようやく目覚めた。

はあはあ、と激しい息切れを起こし、自分の手を見る。

びっしりと汗で濡れており、体温が極度に上がっているのがわかった。

胸を苦しそうに抑えていると、彼の顔を咲華と和葉が心配したように覗き込んでおり、彼が目を覚ますと同時に表情を明るくし隣にいた後藤に叫んだ。

『映司さん!!後藤さん、映司さん目を覚めました!!』

「火野！！よかった……心配してたんだぞ皆。」

「後藤さん……俺……。」

「コンボと精神的な疲労だろう。そのせいで完全に抑えた紫のメダルが反応しただけだ……。心配する事は無いさ。」

「はい……そう言えばここは？」

「ようやく気付いたが、ここは何処なのだろう？」

「見る感じ洋館……それかなり大きい。」

「映司に掛けられていたこの毛布も使い古された感があり、生活感漂っていた。」

「ここは和葉ちゃん達の暮らしている洋館『鳴桜邸』だ。」

「後藤さんが連れて来てくれたんですか……？」

「いや……。」

「言葉を濁すと、後藤は首をクイツと後ろにやった。」

「映司がその方向をみると、そこにはテーブルに腰かけて優雅そうに紅茶を飲んでいる1人の少女……というか美少女……というか超絶美少女が。」

「その隣には背が高く金髪……これまた超美少女と、長髪黒髪で後藤ぐらいには身長がありそうな美少女……というより美人の姿も。」

「後藤は映司を立たせると、彼女達の前に椅子に座らせた。」

「俺達を助けてくれたのはこの子達だ。」

「そ、そうなんですか……危ないところを助けてくれてありがとう！」

「いえ。」

「そっけなくそう言うのは黒髪で紅茶を飲んでいる少女。」

「両目が淡い緑色に輝いており、その瞳は見る者全てを魅了するかのよう。」

「和葉と咲華はその少女から目を逸らしており、もう2人の少女はそれをため息をついた。」

「嵩月奏と申します。和葉さんは高校の後輩です。こちらの2人は黒崎朱理第三生徒会長と、アニア・フォルチュナさん。」

「俺は火野映司、こっちは俺の友人の後藤さん。」

「後藤慎太郎だ。さっきは危ないところを…本当にすまない…。ところで、先ほど君が使っていた炎は一体？」

「炎？」

映司は彼が何の事を言っているのかわからないようだ。

後藤はああ、と頷くと嵩月を見据える。

何でも、彼らがハグルマヤミーに襲われていた時、彼女が腕から『炎の剣』を召喚して自分達を助けてくれたらしい。

そして帰る途中で彼女の仲間である朱湮とアニアに偶然遭遇し、そのまま手を貸してもらい和葉の家であるこの鳴桜邸に帰ってきた…というわけだ。

改めて映司がお礼を言おうとするが嵩月は彼を遮り、視線を後藤へとずらして彼を睨んだ。

「そろそろ聞かせていただきますしうか…何故『仮面ライダー』が、またこの世界にいるのかを…。」

「うっ…。」

そこで言葉に詰まる後藤。

何故かと言われても、そんなのこちらが知りたい。

それに今の嵩月の言葉…どうも何か引かかる。

まずは仮面ライダーという単語…それと『また』という言葉。

彼らの世界では『仮面ライダー』という単語はほとんど使われず、使うのも鴻上フアウンデーションの上役のみ。

この言葉を知る者はほとんどいないはず…それなのに嵩月は仮面ライダーを知っている。



『また』と言っているという事は、以前もここに仮面ライダーがいた事があるのだろうか…？

「？ 知らなかったのですか？ あなた方…翔太朗さんやフィリップ君…仮面ライダーダブルの仲間でしょう？」

「ダブル！？」

「アクセルの仲間か！！」

「？」

仮面ライダーダブル…それは、数か月前にオーズ達と共に戦った風都の仮面ライダー。

超巨大エネルギー体…仮面ライダーコアを共に倒した同志であり、仲間。

仮面ライダーアクセルとは後藤の変身した仮面ライダーバースと共に闘った事のある風都のライダーであり、会った事があるのはその時一度きりだ。

まさかダブルがこの世界に来ていたとは…、

「ダブルか…いや、俺達はダブルとまた別の世界から来たんだ。」

「俺達が住んでいるところにはダブルはいない…だがまさか、別世界のライダーもここに来ていたなんて…。」

「…：…そうですか、なら、私達の事も知らないんですね？」

「う、うん…。」

「私たちは洛芦和高校科学部です、かつて…：…仮面ライダーダブルと仲間だった者です。」

そう言うと、嵩月は鞆の中から一冊の本を取り出した。

ハードカバーの日記帳…そこには『Double Klein』という文字が。

開いてみると、そこに描かれていたのは4章にも及ぶ壮大な物語…。

第1章……タイトルは『夏日智春』

普通の少年であった夏日智春は彼に取り付く幽霊…水無神操緒と平凡な毎日を過ごしていた。

しかしその日常を、『悪魔』と『機巧魔神』が支配する事になる。

彼の前に現れた嵩月奏は『悪魔』であり、彼の持っていた『イクストラクタ』と呼ばれるトランクケースを奪おうとしていた。

それは機巧魔神を呼び出すための祭壇…それをめぐり、智春が物語に身を投じるまでが描かれている。

第2章……タイトルは『仮面ライダーダブル』

夏の終わりがごろ…彼らの前に異界より謎の2人組が現れた。

左翔太郎とフィリップ…彼らは謎のベルトとメモリを使い、『仮面ライダーダブル』と呼ばれる戦士へと変身。

彼らとの出会いにより、智春達『科学部』は『アスラメモリ』と呼ばれる未知の存在に遭遇する事に。

それは人や物を『機巧魔神』へと変化させる恐るべき存在であり、このメモリにより事件を解決するまでが描かれている。

第3章……タイトルは『一巡目』

アスラメモリの謎を追っていた智春と翔太郎たちの前に現れた智春の兄、『夏日直貴』

彼から聞かされる世界の真実…この世界は『一巡目の世界』が滅びた事により生まれた偽りの世界だという事。

そして彼の持つ最強の機巧魔神『鋼』を狙い…今まで仲間だと思っていた男が裏切った。

彼が鋼を手にしたことで時空が暴走、智春と翔太郎は滅びる前の『世界』へと飛ばされ、そこで重大な決断を迫られることとなった。本作における最大の長編であり、彼らが決断し、この『二巡目の世界』に戻ってくるまでが描かれている。

最終章……タイトルは『クロガネ』

鋼を手にした者との最終決戦。

勝利の余韻に浸るのもつかの間……世界が滅びゆく原因となった神『デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神』が出現し、全ての世界を滅ぼそうと動き始めた。

それを止めるべく、智春は操緒の力を駆り、世界最強の戦士『仮面ライダークロガネ』へと変身。

ダブルや仲間たちに別れを告げ……彼は神を滅ぼすべく、科学の光が落とす影となった……。

「私たちはこれに、『Double Klein』……というタイトルを名付けました。」

「そう……私達は忘れてはいけないのよ、彼らの覚悟をね……。」  
今まで黙っていた長髪美人……朱湮が口を開く。

彼女は鳴桜邸におかれていた、彼女達とその『智春』なる人物、それと翔太郎とフィリップが写っている写真を手にとると、翔太郎の顔を指でそっと触りながら儚げに呟いた。

「改めて、私は黒崎朱湮、科学部の部長で……ダブルの雇い主よ。」

「あ、どうも。火野映司です。」

「後藤慎太郎です。」

「別にそんなに畏まらなくてもいいわ。あなた達も呼ばれたのね……この世界に……。」

「ええっと……そんな感じ。」

確かに呼ばれたと言えば呼ばれた……とも言えるだろう。

あの時に聞こえた謎の声……其れに導かれ、映司と後藤が……仮面ライダーが飛ばされてきたのだ。

アネクと伊達は恐らく、元の世界にいるだろう。

「それにしても……何でこの世界にばかりライダーが集まるのか……不思議でたまらん。」

「えっと……君はアニアちゃん……だっけ？」

「ああ、そうだ。アニア・フォルチュナ・ソメシユル・クラウゼンブルヒ。ニアとでも呼べ。」

腕を組み、そう言う金髪少女アニア。

以前ダブルがこの世界に呼ばれた時は、『ダブルの世界』から持ち込まれたガイアメモリ技術をつぶすためだったそうだが……オーズ達は何故？

和葉から生まれたあの無機物系のヤミー……それが何かの手掛かりになるかもしれない。

だがタジャドルでもバースでも通用しないあのヤミーがそう簡単に倒せるとも思えない……。

（最悪の場合は……『紫』を使うしか無いのかな……。）

「ところで……奏ちゃんだったっけ？この本にたびたび書かれている……『機巧魔神』とは何なんだ？」

映司が1人悩む中、後藤は嵩月の本に何度も出てくる単語について尋ねた。

アスラ・マキーナ  
『機巧魔神』と呼ばれるそれについて、彼女の代わりにアニアが説明を始める。

「機巧魔神とは、愛しい少女の魂を生け贄に捧げて動く機械人形の事だ。元々は異世界探査用の装置として開発した物だが……迫りく

る世界崩壊を前に戦闘用に切り替えた対悪魔兵器だ。全部で21体存在し、うち3機はある事情で現在は存在していない。この機巧魔神を操る者は『演操者』<sup>ハンドラー</sup>、生け贄にされた少女の事は『副葬処女』<sup>ベリアル・ドール</sup>と呼ぶ。特に副葬処女は一見すると幽霊見たいに、演操者につねに付きまとっているのだ。」

「え…？それって…？」

何かに気付き、後藤が和葉を見た。

彼女の隣にいる咲華…確かに幽霊だが、あまり幽霊っぽさが感じられない。

もしかして…そう思って後藤は和葉に尋ねた。

「和葉ちゃん…君ももしかして、演操者なのかい？」

「え！？」

何それみたいな表情で驚かれた。

どうやら違うようだ。

しかし咲華の方は和葉とは対象的に何か意表を突かれたという表情になり、そのまま沈黙。

「和葉さん、あなたに先日お渡ししたトランク…あれこそが機巧魔神の祭壇『イクストラクタ』です。」

「え？…ええー！？」

嵩月がそう言うと、和葉は更に驚きの表情になり、慌てだした。

何故自分にそんなものを…？尋ねたが、嵩月は『元々アナタの物です』の一点張りで何の説明もしてくれない。

それより…と、嵩月が後藤達をキツと睨み、腕を組んだ。

「で、あの怪物は何ですか？そろそろそちらの番ですよ？」

「あ…ああ…まずあれは『ヤミー』、俺達の世界に存在するメダルを使い、欲望の怪人『グリード』が人の欲望から生み出した怪物だ。」

「メダル？メモリでは無いんですか？」

「うん、俺達の世界には…俺の持つこの色つきのメダル『コアメダル』と、後藤さんが持つて無色の『セルメダル』っていうのがあるって…。コアの方がセルよりも強いんだけど、数が少なくいんだ。」

「セルメダルは俺を仮面ライダーバースに…コアメダルは火野を仮面ライダーオーズに変身させる力を持っている。この力で俺達はグリードやヤミーと戦ってたんだが…まさか異世界、それも無機物系のヤミーが出るなんて…。」

本来、ヤミーとグリードは『動物系』しか存在しない。

鳥類、昆虫、猫科、重量系、水槽系、恐竜系…計6種類

何故ならヤミーを生み出しているグリードにはコアメダルが必須…そしてそのコアメダルの誕生には『動物達のエネルギーを込める事』が必要なのだ。

それなのに無機物系…あり得るはずなどない。

「確かめましょう…。」

「火野？」

「俺達であのヤミーの正体を暴くんです…。きっとあいつ、今も和

葉ちゃんのお兄さんを探してさまよってるに違いない……!! 新たな被害が出る前に……俺達の手で奴を倒して、グリードを探すんです!」

「映司さん……。」

「……探す当てはあるんですか?」

冷たく嵩月が言い放つ。

すると映司はニヤリと笑い、自分の胸を掴んだ。

そこには最強のコアメダルが7枚も眠っている……これがあれば映司はグリードと同じ力を得られる。

最強のグリード……『プトティラ』の力を……。

「行こう……後藤さん……!!」

「ああ……そういうわけだ。俺達はこれからヤミーを探す。火野を助けてくれて……ありがとう。」

それだけ言い残し、立ち上がる映司と後藤。

すると和葉と咲華が彼らに駆け寄り、映司の裾をギュツと掴んだ。

「私も行きます!」

「え……? 和葉ちゃん……?」

「あの怪物……私から生まれたんですね……? なら、私も最後まで見届けたい……お願いします映司さん!! 後藤さん!!」

『私からもお願いします、この子……最後までやらないと気が済まない子だから……。』

「……わかった、行こう!!」

「『はい!』」

2人の同行が決定すると、映司と後藤はそれぞれのベルトを巻き付け、メダルを用意。

映司のメダルが反応しているのは鳴桜邸よりも南の方角……だいたい洛高あたりだ。

「『変身!!!』」

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ!タツ!トツ!バッ!  
!』

『カポーンッ!カポーンッ!カッターウイング』

映司はオーズ タトバコンボに、後藤はバース カッターウイングに変身すると、オーズはライドベンダーに跨り後ろに和葉を乗せ、バースと共に気配のする方向へと走り出した。



## メダルズ9…生徒会室とお守りパンツと再誕生（前書き）

『オーズクライン〜玻〜』、前回までの3つの出来事!!

1つ、負傷した映司が鳴桜邸へと運ばれる!

2つ、そこで映司と後藤は、嵩月奏らより仮面ライダーダブル達の戦いについて聞く!!

そして3つ、再び出現したハグルマヤミーを倒すため、2人は和葉と共に、洛高へと向かった!!!

## メダルズ9…生徒会室とお守りパンツと再誕生

洛芦和高校第一生徒会室

コンコン！

「入りましたえ。」

「失礼します、お兄様。」

丁度日が完全に沈む春の午後七時……第一生徒会長である佐伯玲士郎はこの時間まで居残り、書類の整理をしていた。

第一生徒会の役目は校内の治安維持……その為に去年の三学期末に当時の一、二年生から取ったアンケートを元に制作した書類を、この時間まで1人で片づけていた。

すでに他の生徒は運動部すら帰宅しており、校内に残る生徒は彼1人……と、思いきやもう1人。

先ほど生徒会室に入ってきた少女……彼の妹で第一生徒会副会長の佐伯玲子。

彼女は彼の下に温かい紅茶とクッキーを用意しテーブルに置き、彼の隣に座った。

目の前に積み上げられた書類に手を伸ばすと、佐伯も玲士郎と同様に書類整理を開始。

「なんだ玲子、まだ帰って無かったのか？」

「お兄様こそ、こんな時間まで1人でお仕事だなんて。お疲れ様です。」

「まあ……同じ第一生徒会長でも、二年の三年ではやはり忙しさが違う……まっ、主に普段の学業の方だがな……。」

「当然です。生徒会の仕事量は去年と同じでも、お兄様は三年生……」

：受験生なんですから。」

「これをこなしてた倉澤先輩と橘高先輩は大したものだよ……全く。」

今は卒業し、ここにはいない2人の元生徒会長の名を呟く玲士郎。彼女達とはもめごとばかり起こしていたが……内心では誰よりも彼女らの事を尊敬していた。

第二、三生徒会長は玲士郎と同学年の者に引き継がれ、生徒会長経験があるのは二年の時から生徒会長をやっていた玲士郎のみ。

自分がこの先、この洛高の生徒を引っ張っていく……そう感じて彼は毎日毎日夜遅くまで仕事をし、酷い時には深夜まで続いた事もあった。

それでも彼が今でも頑張っているのは妹の玲子のおかげ。玲士郎が深夜まで仕事をしてから以降……こうやって適度なところで彼女が止めてくれている。

「お兄様、紅茶を飲んだら帰りましょう？ まだ夜は冷えますし、ずっと学校にいては風邪をひいてしまいますわ。」

「ああ、そうだな……ありがとう玲子。」

笑いあう佐伯兄妹。

玲士郎が紅茶を飲み、帰ろうとして上着を羽織ったその時だった。

バゴオオオオオンン！！！！！！

生徒会室のドアが突然破られたのは。

驚く2人……その前に現れる鋼色の怪物。

『ギギギ……お前が夏目智春か……!?!?』

ハグルマヤミーだった。

見た事も無い謎の怪物を前に、顔をこわばらせる玲士郎と玲子……それから数秒してからハグルマヤミーは腕の歯車を電動ノコギリの様に回転させ始め、2人に突進してきた。

「下がってろ玲子!!」

「キャア!!」

玲士郎は生徒会室に飾ってある剣を手にとると、それを構えて玲子を下がらせた。

ハグルマヤミーの突進をその剣で受け止めると、彼はハグルマヤミーの攻撃を流すようにかわし、蹴り飛ばす。

伊達に洛高の生徒会長を任されていない……彼の戦闘能力は本物だ。だがそれでも怪人であるハグルマヤミーと、基本的には普通の人間である玲士郎の『種族としての差』は埋められず……じわじわと圧されていく。

ここまでか……玲士郎がそう感じた時、何者かが……背後からハグルマヤミーを撃ち抜いた。

「君!! 大丈夫か!!!!」

「あ……佐伯会長……さん!?! 副会長さんも!!」

振り返ってみると、そこには今朝見た新入生……苑宮和葉の姿と、慣れぬ2人の青年の姿が。

そのうちの1人……映司が玲士郎の肩を掴んで起き上がらせると、玲

子と共に逃げるように促す。

「さあ、ここは危険だから早く!!」

「あ……貴方は……!？」

「お兄様……」

「火野さんの言うとおりです、早く逃げてください佐伯会長、玲子さん。」

映司により廊下の外まで連れて行かれると、そこには駆けつけた嵩月一行も到着しており、玲士郎と玲子はキョトンとした表情で彼らの顔を見渡す。

そうこうしていると生徒会室の中ではハグルマヤミーが切れて窓を破り、校庭へと飛び出していった。

「あ、し、しまった!!」

「任せろ!!」

先ほどヤミーを撃った青年……後藤は背中中のリュックからバースドレイバーを取り出すとそれを腰に装着。

腕バントに嵌め込んでいるセルメダルを取り外すと、それをベルトに投げ入れてレバーを一気に回した。

「変身!」

『カポーンッ!』

残り2枚のセルメダルのうち1枚を使用し、後藤は仮面ライダーバースへと姿を変える。

最後のメダルをベルトに再び挿入すると、もう一度ハンドルを回し、彼は『CLAWS』装備の一角を発動した。

『カポーンッ!カッターウイング』

背中にカッターウイングを装備すると、バースは出力を上げてそのままハグルマヤミーを追いかける。

勢いを落とさずにハグルマヤミーを捉え、ウイングのカッター部分でハグルマヤミーの腕を切り裂いた。

『ギギギいいい！！！！』

「ここから勝負だ！！」

カッターウイングを背中から取り外し、剣の様にして戦い始めるバース。

突然の出来事に佐伯兄妹は茫然とした表情になり、ようやく我に戻ると壊れた生徒会室の窓から下を見下ろした。

「か……仮面ライダー！？ダブルじゃ無いか！？」

「ここは危険だから早く逃げて！！和葉ちゃんと咲華ちゃんは2人をお願い！」

「映司さんは！？」

「俺は後藤さんのところへ！！変身！！！」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タツ！トツ！バッ！』

映司も後藤に続いて変身を遂げ、仮面ライダーオーズ　タトバコンボへ。

まさか映司まで変身できるなんて思ってたのか、嵩月や朱浬達も驚いている様子で、そんな彼女らに構わずにオーズはバッタレッグを変形させてバースの下へ飛び降りた。

飛び降りながらメダジャリバーを構えると、着地際に勢いに任せてハグルマヤミーを切り裂いた。

もはやカッターウイングしか使用できないバースと、体力が限界のオーズ…。

この2人で強敵ハグルマヤミーを相手にしなければならぬと考え

ると……さすがにきつい。  
でもやるしかない。

そう思い、バースは再びカッターウィングを、オーズは地面からメダガブリューを取り出し、ハグルマヤミーに向かい合った。

### 『オーズの世界』

「！！ 映司！！ヤミーだ！！あ……っ。」

「どうしたのアンク？」

ここはクスクシエのいつものお部屋……そこで寝ていたアンク（信吾付き）は飛び起きると同時にそんな声を上げた。

丁度その頃部屋の掃除に来ていた比奈が『？』という表情を浮かべ、アンクに取り憑かれている信吾は心の中で『ふう』とため息をつく。アンクから離れるや否や信吾は映司が使っていたベッドに腰掛け、アンクに言った。

「忘れたのかアンク？ 映司君達は今ここにいないんだ。」

『チッ、わかってるそんな事ぐらいなあ……。』

「よっぽど映司君が心配なみたいだね、最近戦闘の度に『映司い！』って声あげてるよ。」

『な！？ どうしてそれを……。』

「わかるよ、お前はもう一人の俺なんだから。それよりヤミーだろ？ 伊達さんもそろそろ来るだろうし……メダル取られたくないんなら俺達も急がないと。」

『くっ……。』

そう言って信吾は再びアンクに取り憑かれ、アンクは人の姿に戻った。

窓を開けると背中から大きな2枚の赤い翼を出現させ、屋根の上に

立つアंक。

それを見た比奈は『あ、待って』と声をだし、ベットから1枚の布きれをアंकに差し出した。

「アंकこれ持ってって！」

「あ？何だこれは…？」

「映司君のパンツ！お守りに！」

「いるかそんなもん…！！」

当然の反応だろうが、拒否されてしまった。

確かに、いくら相棒でもパンツをお守りとして持っていく奴はいない……いてたまるか。

むすっとした表情になる比奈……それを放っておけないのが、アンの体の主たる泉信吾だ。

彼は比奈から映司のパンツを受け取ると、それをポケットにねじ込み、笑った。

『じゃあ比奈、行ってくるよ。』

「うん、2人とも気を付けてね！」

（ダメだこの兄妹早く何とかしないと。）

そんな事を考えながら、アंकは下へ飛び降りてライドベンダーを一台起動させると、ヤミーの気配を頼りに走り出した。

「せいやあー！！」

「はっ…！！」

『ギギッ…！！』

オーズとバースの連携攻撃により、反撃のすきを狙う事の出来ないハグルマヤミー。

カッターウイング、メダジャリバー、そしてメダガブリューと言っ



た『オーズの世界3大刃物』を前に、ハグルマヤミーはただただ圧されるのみ。

バースの方はメダル不足で満足に攻撃が出来ないが、オーズは違う。彼はコアメダルさえあれば自在に姿を変化させ、戦う事が出来るのだ。

新たなメダルを3枚取り出すと、オーズはバックルを傾けてメダルチェンジ。

3枚のメダルをすべて取り換え終わると、メダジャリバーとメダガブリューを地面に突き立て、オースキャナーでスキャンした。

『クワガタ！クジャク！コンドル！』

目の前に『緑、赤、赤』のメダルが出現すると、オーズはその姿をタトバコンボから亜種形態『ガタジャドル』へと変えた。

同時にメダガブリューが消え、タジャスピナーのカバーを開けると、変身するたびにその中に現れるセルメダルを一枚手に取りバースへと投げる。

「後藤さんコレを！！」

「ああ、すまん！！」

ハグルマヤミーを蹴り飛ばし、バースはオーズから受け取ったメダルをバースドライバーへと装填。

カッターウイングを再び背中に装備し直し、ハンドルを回す。

『カポーンッ！ドリルアーム』

右手に伊達明御用達の代表装備『ドリルアーム』を装備すると、バースはオーズと並び、それぞれドリルの右、スピナーの左でライダーパンチを放った。

それによりハグルマヤミーが怯むと、今度はオーズが新たにメダルをスキャンし、そのまま突進してくる。



『ギギギギギギギギイイイイイイイイイイイ！！！！！！！』

オーズの『タトバキック』とバースの『ドリルアームシュート』が同時にハグルマヤミーへと炸裂。

その場で大きな爆発が巻き起こると、メダルが辺りに散乱。

2人は何とか着地すると、勝利の証にお互いに拳をぶつけ合った。

「やりましたね後藤さん！」

「ああ、やったな！」

その様子を見ていた和葉はと言えば……………、

「あ……………」

『どうしたの和葉…？』

「腰……………抜けちゃった……………」

完全に脱力していた。

元々ハグルマヤミーは和葉から生まれたヤミー……………そのヤミーを倒した2人の新たな仮面ライダー。

普通ならばもっと喜んでいいはずなのだが、元凶である自分がこんなところで見ているしかできず、いくら強いとはいえ会ってまだ間もない異世界の住人達がハグルマヤミーを倒す……………なんと情けない。自分の無力さをつくづく思い知る和葉……………その時だった……………。

『……………ギギ……………ッ！』

「!!!!」

「どうした火野……？」

突然オーズの瞳が紫色に発光した。

何事かと思えばースが彼の顔を覗き込む……その時、先ほど倒したはずのハグルマヤミーの残骸たるセルメダルが……一枚のメダルを中心に固まりだした。

しかもメダルの量に比例していない程でたらめな大きさに再構築されていく……これは……、

『許さんぞ仮面ライダー……夏目智春を……出せええええええ!!  
!!!!!!』

ハグルマヤミー……それが巨大な歯車の怪物として再誕生した瞬間だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2223w/>

---

オーズライン～玻～

2011年11月29日21時45分発行